魔女のキッチン

友野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女のキッチン

【Ｎコード】
Ｎ０１２１Ｋ

【作者名】
友野久遠

【あらすじ】
同級生恋愛結婚した特に問題ない夫婦の他愛ない物語、それが結婚生活のはずだったんだけど、ある日亭主は体調をくずし、その日から私の生活は食事の支度、支度、また支度。夫婦の関係も亭主の体調もどんどん変化していく。
創作部分がほとんどないので、文学からエッセイへジャンル変更しました。不定期更新。

1、もと王子さまと夢見る乙女の成れの果てがベッドでエッチするのが夫婦なの

「ゴミ出しなんぞ男のやることじゃない」
うちの亭主はそう言って、朝のゴミ出しを決して手伝わない。
察するところ背広が汚れるのが嫌だったり、近所の人に奥さんの手下みたいに見られるのが嫌だったり、単に面倒だったりするのだろう。
こっちも特別カカア天下を志す妻ではないので、無理をしてまでゴミ袋を持たせる気にはなれないのだが、それにしてもそこまで大時代的な台詞を持ち出さなくても良さそうなものだと内心うんざりしている。

素直に「俺が外でいいかっこするのに協力してくれ」とか言っちゃえば男の人も楽に生きられるんだろうに、そう簡単には行かないらしい。　男サマのプライドは、開発されたばかりのお掃除ロボットみたいに、ちっちゃな出っ張りにも引っかかって動きが取れなくなるものなのだ。
男サマがどれほど偉く、男サマがどれほど立派な仕事がふさわしいのか私にはわからないが、たかが数十メートルばかりゴミ袋をぶら下げて歩いたくらいで地に落ちる程度の品格なら、なくても同じではないかと思う。

こう言ったからと言って、私が亭主を馬鹿にしている訳では決してない。　むしろその逆だと思う。　男の人にはチマチマしたことにこだわらず、威風堂々とそこにいるだけでオンナコドモを凌駕して頂きたいと願っている。　正真正銘の王者であるなら、ボロを着て門番の仕事を手伝い、時には人に頭を下げたとしても、やはり王者の風格を感じさせるものだと思うし、そうあって欲しいわけだ。

理想が世界を駆け巡ってしまうほど、私は亭主に期待しているのだ。　何故なら、例え35歳の若さで不必要に胴回りが巨大化していようと、顎と首の境界線が曖昧になりつつあろうと、名前を呼ぶどころかオイとしか呼びかけてくれなかろうと、その男は私が選んだ白馬の王子様に違いないからだ。

時の流れは恐ろしいもので、若さと共にあらゆるものが失われつつあるにしても、亭主と言うものはやはりいい男であると信じたいのが、乙女の成れの果てのおばさんの純情ってものである。

こら。　笑ってはいけないぞ。

おばさんにだって純情は残っているのだ。　いや、現実部門で使い果たした分、妄想部門では逆に純情ばかりがもっさもっさと育って、容器に入らなくて持て余しちゃったりしているのだ。

朝起きて、布団から抜け出すときに見下ろすこの亭主の寝姿のシルエットも、できればペンギン腹の部分を削除して妄想のシャッターを切れたらなあ、なんてむなしい事を考えるのである。

「今何時だ」

私が布団から抜け出そうとすると、亭主が目を開けて聞いた。

「5時45分。　そろそろ起きる？

今日から島根に出張でしょ」

「6時半まで横にならせてくれ。　なんだか妙にだるいんだ。

風邪でもひいたのかな。　疲れが全然取れてない」

「大丈夫？　昨日も起き抜けにだるいって言ったよね」

「そうだっけ」

「疲れてるんだよ。　寝てて。　ゴミ捨てて来るから」

見ろ見ろ、私は優しい妻だぞ。

疲れてるのは事実だと思うから反論なんかしないんだぞ。　いたわったりなんかもしちゃうんだぞ。

でも本音を言えば、主婦と乳幼児の母親とを兼ねてフル回転してる私にしたら、「それくらいで疲れんなよ！ゆうべ８時間も寝てたろ、こっちは３時間半寝ただけで頑張ってんのに」と鼻で吹き飛ばしたくなってしまう今日この頃だ。　それでもちゃんと旦那を立ててる、偉いじゃないか誰も褒めてくれんけど。

主婦業は重労働だ。　とりわけ乳幼児の世話の大変さは会社勤めの比ではない。　私が言うのだから間違いない。

独身時代の私は、ものすごく疲れる会社に勤めていた。業界でワースト１と言われたほど残業の多い広告デザイン会社だ。

９時出勤で６時終業なのに、６時半に営業の人がやって来るのがまず異常。

「ヨルイチで取りに来るからお願いね」と原稿を置いて行くのがさらにおかしい。　ちなみにヨルイチとは夜１０時のこと。

ヨルイチで仕上げたデザインを取りに来た営業は、

「こっちはヨルサンでいいや」と次の仕事を置いて行く。　ヨルサンは４時頃を指す。

男の人は平気で徹夜するのだが、女性は２時を回ると帰してもらえる。　そんなことで有り難がるのはもう異常なんだけど、ありがとうすみませんと恐縮して家に帰って、風呂に入ったら４時５時になってしまう。

それからベッドに入ったら間違いなく寝過ごすから、出勤の服装に着替えてから、玄関先で寝袋に入って寝ていた。　２０日くらい横になってない時期もあった。

そんなとんでもない仕事をやめて結婚した時は、天国のように時間があった。

一日が長く充実していた。

ところが子供が生まれて、亭主が昼間に活動するのに合わせて動きながら乳児の世話を四六時中やってみて愕然とした。

これは、あの残業漬け勤務のほうが数倍も楽だ！！
何故なら、あのころは玄関で寝ている2時間の睡眠時間は、スイッチを切ってもいい時間だった。　帰りのタクシーの中でも、自分の妄想にふけることを責める人はいなかった。
子育ては、そのスイッチを切る数時間数分の時間さえ、母親という勤務時間なのだ。
いつだってスタンバイしてないとまずいのだ。　そのプレッシャーはやってみないとわからない。

亭主よ、疲れた疲れたとのたまうなかれ。
どんな重労働だろうがどんな重責のある任務だろうが、あんたたちは家に帰ったら、そのトドのようなお腹を畳の上に陳列して、ポテチをかじりながらテレビを見てていいんじゃないか。
風呂でゆっくり体を洗うことも、トイレで新聞を読むことも、洗面所で鼻毛を抜くこともできるじゃないか。

乳幼児の母はその時間も子供の「かまって攻撃」を受け続けている。
トイレで用を足しているわずかの時間に下の子はティッシュを食べスリッパをかじる。　上の子はたんすの上から落ち、牛乳をこぼしおしっこを漏らす。
風呂に入ったら、哀れな母は子供の体ばかり洗い、自分は洗えないままに脱衣場に逃走され、子供を拭いている間に自分の体は乾き、奪われた気化熱のために風呂上りに一人で寒がる。
ご飯は食べている横でチビどもにこぼされ散らされひっくり返され、時には口から戻されて何を食べたのかわからないうちに食欲が減退する。
自分の時間は夢の中でも望めない。　隣で転げまわってたんすにぶつかる気配がするからだ。

でも、そんなことは亭主に言ったりはしないですとも。
旦那はとりあえず白馬の王子の成れの果てであるわけですもんね。
なんてけなげな、少女の成れの果てである私でしょ。

でも、願わくは夜のほうのテンポは、もう少しこっちに合わせて欲しいもんだわ。
自分が眠くなる前にと思うんだろうけど、子供が寝たか寝ないかの宵の口にいきなりベッドに引っ張り込まれてもその気になれやしない。　多分亭主の方も同様で、ボルテージが上がらないもんだから、初っ端からエッチビデオを流しっぱなし。　上になって頑張ろうとしたら、
「おい。　見えないから頭下げて」
とか言われたりして。
ああ情けない王子さま。

1、もと王子さまと夢見る乙女の成れの果てがベッドでエッチするのが夫婦なの

知り合いに見られたら困るなーと思うほど、事実に近い事を書いてます。
気が向いたときに更新と言うことで、気まぐれでスミマセンがよろしくお願いいたします

2、深夜の電話と子供の夜泣きとどちらが主婦のストレスを増やすか

ゴミ出しは6時半までに済まさねばならない。
その時間に出さないと、子供の手を引いて歩かなければならなくなる。　1歳と2歳半の年子の姉弟は早起きで、当たり前のことだが四六時中家にいて飯を食らう。　寝ているうちに出来ることは極力済ませておかないと、結局自分が泣くことになる。

「おはようございます」
ゴミ置き場から戻る途中で、落合さんのご主人に出会った。
落合さんは我が家のすぐ下の４０３号室の住人で、濃い目の細面が印象的な旦那さんだ。　そして羨ましい事に、毎朝必ずゴミを下げて出勤する姿をご近所に見せても、男でございと踏ん張らないらしい。
むしろ、この朝もっと踏ん張って欲しかったのは、パンパンに中身が詰まった落合家のゴミ袋だった。
「おはようございます」
私に笑顔で挨拶を返した途端、落合さんのご主人の持っていた生ゴミの袋が、もう辛抱たまらんとばかりに弾けた。　夏の日の鳳仙花の種みたいに中身が地面に撒き散らされる。
「おわわッ」
「あらららッ大変！」
落合さんは、袋とゴミを見比べて、それがもう元の状態に戻すこと叶わぬと思ったのか、真っ青な顔で自宅の窓を見上げ、腕時計を見た。

「時間がないんですか？」
「その、え、駅まであと5分で行かないと」
「いいですよ。　片付けておきますから、お出かけになってくだ

さい」
「え？　え？　いいんですか？」
すがりつくような目で見られると、あとでゴミ袋一枚返してねとは言いにくく、
「大丈夫ですから行ってらっしゃい」
ついつい良いご近所さんをやってしまった。　まあ狭い社宅に住む同士、この種の親切がアダになることは少なかろう。

このアパートは某大手企業の社宅である。　社宅と言うと、人付き合いが難しく、たとえば上司の奥さんに奥さん同士まで威張られている、とかいったシガラミ満点のストレス社会だと思い込んでいる人がいるが、私には社宅が取り分けてひどいものとは思えない。
いや、ストレスはある。　あるがそんなものは、奥さん同士の密集したアパート付き合いなら別に社宅じゃなくてもあるし、女子高のクラスの中にだって、ＰＴＡにだってママさんコーラスにだって、女というセイブツが密集する場所なら、どこにだって相当濃厚にあるものなのだ。
そこは共学や男子校しか知らない人には、絶対に理解不能な怪しい世界。　何が怪しいかって、やってる本人たちそれぞれがものすごくしっかりしすぎていて、あまりに度が過ぎるために、自分たちが何やってるのか大して把握できてないところが一番怪しい。
だからそういうところの常識と言うものを身につけてさえいれば、そこそこにうまくやって行けるものなのだ。

たとえば人の噂話を聞くときは、「そうですね」と相槌を打ってはいけない、「そうなんですか」と自分が賛成してないことを明確にしろとか。
たとえば井戸端会議にはほどほどに参加するようにして、その時に自分の失敗の言い訳とか将来文句を言われそうなことを先取りした相談とかを、さりげなく回りに流しておくとか。

そんな小細工が通用しない地雷女が引っ越して来たらお手上げだが、その確率は社宅でないアパートでも大差ないだろう。
社宅が人間関係で特別厳しい理由があるとすれば、にっちもさっちもいかなくなった場合でも転出できないからだろう。　どうしようもなくなって、希望を出して転出したら、行った先の社宅にすでに噂が広がっていて…てな感じの恐ろしい噂もいくつか耳にしたことがある。

「なんか、目が回る気がするんだよな。　ふらふらする」
亭主は出掛けまで体調不良を訴えていた。
「休んで病院へ行ったら？」
「馬鹿言え、出張を反故にしたら全体の信用に関わる。
今夜は島根泊まりだから、明日夜帰ったら、あさって休み取って病院に行くよ」
「保険証持ってってね」
「おう。　でもチビ共が怪我でもしたらまずくないか」
「大丈夫よ、あとからでも持って行けるわ」
「わかった。おお、もう出なきゃいかんぞ」
「行ってらっしゃい」

そうして亭主は1泊2日の出張に出かけて行った。
念のため持たせた保険証が大活躍するような事態が２０余時間後に起きるとは、このとき私は思ってもみなかった。

その連絡が入った時、我が家の長男は夜泣きの真っ最中だった。
長男の司（つかさ）は第2子である。　2番目の子は育てやすいなんていう人もいるが、彼はお姉ちゃんの蘭（らん）より数倍も手がかかる。
そもそも出産の時すでに自力で産道を通れず、急遽帝王切開にな

ったのを皮切りに、慢性の下痢や高熱による痙攣、原因不明の発疹と、実に多彩な心配事を生み出す天才のような赤ちゃんだ。　大病をするわけではないので、かえって解決しない不調を気にしてイライラしている期間が長く、親にしてみるとストレスの多い子育てである。

この長男が、1歳を過ぎたころから時々夜中に泣き叫ぶようになった。　夜驚症というのか、寝ていたものがいきなり飛び上がるように起きて、火がついたようにヒステリックに泣く。

これが始まると、抱こうがあやそうが一時間は止まらない。

「よーし、わかった。　もう好きなだけ泣け」

私は司を布団の上に転がすと、長期戦に備えて台所からコーヒーを入れた自分のカップと読みかけの文庫本を持って来た。　ついでにトイレも済ませて戻ると、泣き叫ぶ息子の側にあぐらをかく。

「お前も人として生まれたからには、泣きたい夜もあるんだろう。父ちゃんがいないから明日の朝は母ちゃんもゆっくりしてていいし、まあ気が済むまで泣いてみろ。　声枯れで死んだやつはおらん」

ゆとりのある台詞に聞こえるが、要するに、ついにヤケを起こしたのである。

隣の布団では、蘭がぐうぐういびきをかいて眠っている。　弟がこれほど騒いでいることも、熟睡型の彼女には全く問題にならないらしい。

だから、明日亭主が突然帰って来たりしない限り、ここで問題になるのは、ひとつのことだけである。　つまり、このうるさすぎる泣き声のフォローを社宅の人たちにどうするか、だ。

「みかんをひと箱、買って来るのはどうだろうねえ、つか坊」

泣き叫ぶ司に話しかける。

「こっそり買って来て、『実家から送って来ました』とおすそ分

けに持って回るの。　その時にさ、『夕べはうるさくなかったですか？　すみませんね、こうやったりああやったりしてなんとかしようとしたんですけどぉ。　ああいう時って何かいい方法ないんですかねえ』って言うのよ。　もちろん社宅中に配るわけに行かないから、やかましい人だけよ。　３０２の大沢さんとか、１０５の宅間さんとか、もちろん４０１の紺野ばばあには絶対よね」

何を言っても大声で泣き続ける司に、みかんを口に突っ込んでやりたいやかましい人はおまえや！と言いたくなった、その時だ。電話のベルが、遠慮がちにウルウルと鳴りだした。　遠慮がちに聞こえたのは、司の声に半分以上そのボリュームをそぎ取られたせいであって、夜中の１時だからといって、そっと鳴ってくれた訳ではもちろんない。

受話器を取る前に、泣き声で相手がビックリしないように電話機ごと移動しなくてはならなかった。

「夜分に申し訳ありません」

ああ、相手が恐縮している。　年寄りではない男性の声だ。　自分のせいで赤ちゃんを起こしちゃったと思っているんだろうなと思ったら、気の毒になった。

「私、鳥取支社の橋本と申しまして、ご主人とは2年前の研修でご一緒させていただいた者です。　今夜は再会を祝して一緒に飲みに出たんですが、その・・・ご主人、飲み屋で倒れられまして」

「えッ！！」

「あわてて救急車で病院に運びまして、今、精密検査をしています。　症状は目まいのひどいやつみたいなんですが」

一瞬、あわててしまったらしく、何を考えたらいいのかわからなくなった。　その朝持たせた保険証のことが頭に浮かんだ。　持たせて良かったということではなく、あんな物を持って行くから病院が寄り付いて来たじゃないか、といった、なんだか恨みがましくイ

ジマシイ発想だった。　要するに動転して、休むに似たりの雑念しか頭に浮かばなかったということらしかった。

3、亭主がうっかりヨロめくと、ポケットからお札を撒き散らす

橋本氏の話では、わが亭主どの、倒れたと言っても意識はしっかりしており、実際にはタクシーで行くか救急車を呼ぶか迷うような状況だったらしい。　ただ、かなり深刻な吐き気があったのと、立ち上がると何度でもよろけるのを見ていて、もし脳内出血か何かでタクシーの中で悪化したらと恐ろしくて結局１１９番したのだと言う。

精密検査が済んで診断結果が出たらまた連絡するが、どのみち今夜は病院へ泊まりになる、明日出社できなければ家に帰ることになるから心積もりをしていて欲しい、と言われて、なんだか呆然としてしまった。

電話を切ると、司の声は消え入りそうに細くなっていた。

吐き気がして目まいがする症状なんて、私も脳内出血くらいしか知らない。　その言葉から連想される単語は、半身不随とか寝たきりとか、恐ろしい言葉ばかりだ。　こんなチビ助二人も抱えて、今亭主にそんなことになってもらったら、一体この先どうすりゃいいんだろう。

「ね、寝よう。　なんだかわからないがえらいことになる前にとにかく5分でも寝よう。

つか坊、お前もうテキトーに泣いてなさい、母ちゃん寝るからね。　元気で頑張るのよ」

母親にあるまじきことを長男に申し渡して横になった。

実際のところ、夜泣きの大変さと言うのは精神攻撃であって、周りが図太くなって寝てしまえば大した脅威ではないという一面がある。　赤ん坊は泣いている間は、間違いなく息をしているし、所在もわかる。　全身で泣き叫んでいる間は、大したいたずらもしない。

夜泣きが怖いのは、泣き止んで「夜遊び」に転向した時だ。
泣きもせずに夜中に起きてしまった赤ん坊は、家の中を走り回ったり、遊んだり歌ったりする。　当然、転んだりぶつかったり落ちたり、ヤバい物を口に入れたりする。　つまり、昼間と同じことを一晩中やらかすわけだ。　追いかける母は、寝不足と同時に昼と同じ体力を奪われ、なおかつ夜間の騒音や他の家族への配慮に胸を痛めなければならない。
「つか坊が泣き止んで遊び出したら目が覚めますように。つか坊が泣き止んで遊び出したら目が覚めますように・・・」
自分の枕をポンポン叩いて、誰宛てなんだかわからないがお祈りをしてから、私は目をつぶった。

翌朝、8時半。　銀行に行くために司を着替えさせようと追い回していたら、玄関のブザーが鳴った。
落合さんの奥さんだ。
落合家は、うちよりちょっと年代が上の家族だ。　小学校3年と5年の兄妹がおり、奥さんは亭主に言わせると、「雰囲気が美人」というわけのわからない外見。　まあ、確かに派手ではないが色が白くて小ぎれいな、いわゆる「男好きのする」女性だった。

「朝早くからすみません。　夕べ主人が遅く帰って来てから聞いたのよ。　お世話になったみたいで、ありがとうございました。で、これ・・・」
彼女が差し出した物は、ゴミ袋が1枚と、小さなクッキーの袋。
これだ。　社宅を生き抜く知恵というのがつまりこういうことなのだ。
借りた物は細かい物でも必ず返す。　しかも何か付ける。　相手がその話を誰かにしてしまわないうちに、ノシ付けてオマケ付けて頭下げて返す！！

「主人がね、『地獄で仏を見たよ』って感謝してたわ。　今日は日帰り出張だったから、朝が早くて大変だったのよね。　あ、そのクッキーは気にしないでね。　店での余り物だから早めに食べちゃって」

「店って、お勤めされてるんですか？　あら、“シルフィーベーカリー”じゃない」

クッキーの外袋には、アパートのすぐ裏に最近出来た手作りパンの店のラベルが貼ってあった。　賞味期限はまだまだ先だから、そうは言ってもわざわざ買って来た物だろう。

「そうなの。　まだ子供たち小さいから、昼間働くのはいろいろ心配でね。　ここって、早朝の3時半から6時半までパンの仕込みをやってるのよ。　これなら家族が寝てる時間だから、気兼ねなく出て行けると思って。　その代わり、もう眠くて眠くて」

「が、頑張りますねえ」

それで昨日の朝、まだ奥さんが帰ってないうちにご主人が出発したのか。

こういう話を聞くたびに、なんでそこで奥さんが家族に気兼ねをせにゃならんのかと情けなくなる。

共稼ぎって、なんだろう。　うちの亭主も含め、世のダンナ様方は奥さんが外で働きたいと言うと、

「家事をちゃんとやれるなら、やってもいいよ」なんぞとおっしゃるようだ。

それでもって、「俺って理解あるな」と悦に入ったりされちゃうようだ。

それははっきり言ってまちがってるぞ。　家計を助けるために働くのに、「家事をやれたご褒美」みたいにしたいのは、見栄だか見解の相違だかなんだか知らんがとにかく大きな間違いだ。

考えても見て欲しい。　奥さんが疲れているのをお手伝いしようとして、
「食器洗ってあげるよ」
とあなたが言った時、あなたの奥さんはこう言いますか。
「明日の朝会社に遅刻しないのなら、洗ってもいいわよ」

「それより落合さん、こっちこそすみません。　司がゆうべうるさかったでしょう」
そうそう、うちだって、やることやらなくちゃイケナイのだ。
顔見て別れるまでに、必ず口にしとくのだ。　負債はなるべく残さないのが、社宅マダムの鉄則。
「もう泣き出すと抱いても歩いてもダメで、外に出ると瞬間黙るんだけど戻ると泣いちゃって、しまいにはどうしていいのかわかんなくなってボーっとしてるんですよね」
「あはは、あたしは3時半出勤だから起きて準備しながら気がついたけど、その程度よ。　うるさいなんてことはないわよ。　ダンナも子供たちも気付かずに寝てたもの」
ということは、やっぱり声は漏れてるわけだ。
「すみません」
「何でよ。　こっちがお礼しに来たんだし。　ほんとありがとうね」

落合さんが帰った途端、私は飛び上がり、ダッシュで外出の支度を再開した。
「9時ジャストに出せるように入金してくれないか。　検査料が足りないんだ。　CTスキャンとかやっちゃったし、一晩宿泊になってるし。　いや大丈夫、血管切れてるとかそういうものは出なか

った。　目まいはまだちょっとするけど、なんとかなるよ」
明け方近くなってから電話してきた亭主は、元気なのか元気そうにしているだけなのか、笑いを含んだ声でそう言った。
「待ってよ。　何も出ないって、その方が大変なんじゃないの？　どうして倒れたかわかんないってことでしょ」
「いや、倒れたって言っても、ふらふらするもんだから回転してひっくり返っただけで、意識がどうかしたとかじゃないんだぜ」
「その目まいの原因はなんなのよ」
「まあ多分、寝不足とかなんかで・・・・」

寝不足って、8時間いびきかいてることを言いますか。　そんなんで検査料と夜間治療費と初診料と一泊分宿泊代（しかも3時半なのにまだ寝てない宿泊だ）しめて2万3千5百円かかるなら、カプセルホテルで睡眠薬入りの風邪薬飲んで無理矢理寝てて欲しかった！

「それだけセレブな検査のラリーをやり倒しても、ほんっとにほんっとに、寸分の異常も出なかったのね？」
言葉に毒をたっぷり込めて言うと、私のもと王子さまはぐっと詰まった。
「いやそのまあ・・・・。　帰ってから話すよ」
「あるんかい！！」
「その前に多分、市内に戻ったら保健（ホケカン）管理センターに寄る事になると思う。　そこで、夜間に出来なかった検査の残りをやることになるから、そっちの料金も一緒に振り込んでおいてくれる？」
私はあきれた。
「まーだ検査したりないっての」
「食事してたら受けられない検査もあったからさ。　頼むよ」
「どれくらい入れとけばいいの」
「わからない。　今回の分から宿泊代引いたくらい入ってれば、絶対大丈夫だと思う。

あ。　でも倒れた時に、店の中の物が割れたりしたから、３千円置いてきたな。　それと転倒した拍子に腰をひねって痛いから、あとで接骨院に行くぶん２千円足しといて」
「・・・５万円、まとめて入れとく」
文句を言うよりも現実的な怒りがこみ上げて来たので、口をつぐんで電話を切った。

「くそー。　ひとヨロケ５万も使いやがんの！！！！」

心配そっちのけで腹が立って来た。
５万と言ったら大金だ。　そりゃ、当の亭主様が働いて、ありがたく家に入れてくれたお金ではあるけど、そのありがたいお金様を、酒場でヨロッとして５万！！
決してケチとは思わないが、菓子パンの外袋を見て、
「あ。　これ駅前のスーパーの方が１０円安いよ。　遠くじゃないんだからそっちで買えよ」
何てチェック入れる男が、ひとヨロ５万！　風呂場の電気が点いてたとか、まだ使えるシャツを捨てたとかで２０分くらい説教たれる男が、ひとヨロ５万！　古本屋で買う本を、どんなに読みたくても１００円に下がるまで買わない男が、ほんとにもう、ひとヨロ５万！！！！

「行くよ、蘭。　今月のメニューは来る日も来る日も、豆腐とモヤシに決まりだぜィ」
司をベビーカーに詰め込みながら、私は言い捨てた。
でも、この台詞がまさか相当近いカタチで実現することになるとは、またしても想像だにしなかったのだった。

4、医者に下痢便呼ばわりされる、亭主の血液って・・・・

「出社に及ばず」

その言葉を聞いたのは、その日の夕方だった。

島根出張を棒に振って帰社した亭主が、その足で保健(ホケカ)管理センターに行き、検査をして診断を受け、結果を会社に提出して得た、いわゆる会社命令である。

「・・・及ばず、って言っても、やんなくていーよー、じゃないんだよね。

これは『出るな』という意味よね？」

わざわざ念を押して、亭主の渋面を2割増進する。

「まあな。　うちは組合やホケカンが、社長より発言力強いからな」

「その間、給料はどうなるの？」

「しばらくは有給が溜まってる分で何とかなるけど、3ヶ月も4ヶ月もじゃないからな。

できるだけ早めに出られるように頑張らないと」

「1ヵ月もあったら、目まいの原因くらいわかるよね？　わかったら止めてもらえるよね」

問いかけると、何故か亭主は非常に言いにくそうに首を振り、実は、と検査結果の書かれた用紙を取り出した。

「めまいがなくなるまでじゃなくて、ここのこの数値が下がるまで、なんだ・・・ごめん」

「ごめんて、何が」

用紙を覗き込むと、問題の箇所らしき部分に、黄色の蛍光ペンで丸がつけてある。

“総コレステロール値　３６９
ＬＤＬ　　２３２”

「何？　これって異常なの？」
すぐには意味がわからなかった。
いまでこそ、テレビや新聞でコレステロールという言葉が一般的になっているが、当時は医者しか使わない種類の言葉で、病気になったことのない人間はあまり耳にすることがなかった。　ましてやこの当時、２０代で結婚してからまだそういう検診の対象になったこともなかった私は、検査そのものに対しても無知だった。

「基準値の2倍以上あるんだそうだ。　血液の詰まりやすさを表している数字だってさ。
体重がこのまま増え続けると、血管が詰まってしまうんだって。
だから、この数値がせめて半分に下がって、体重があと7キロくらい落ちないと、出社して仕事するのは難しいって言われたんだ」
「ちょ、ちょっと待って！」
私はキッチンからファイルを一冊持って来てページをめくった。

「6月に会社でやった健康診断で、もうこれと同じくらいに高い数値が出てるのに、気をつけろって言われただけだったでしょう。
今さら欠勤してまで下げるのって・・・」
「だから、今、具合が悪いからだろ」
「これが原因で起こってるめまいなの？　どこか血管のつまったとこが見つかったわけ？」
「まだだけどさあ」
亭主は大きくため息をつき、あぐらの足を組みなおして説明した。
「はい、ここにいる社員、香川一平君と言う人が、夕べ体調崩し

て業務に穴開けたわけです。
　なんで具合の悪い人間を働かせていたのか、健康診断で異常が出ていたのに改善されていないのか、組合は騒ぐ、医者はどうしてもなんかしなければいけなくなる」
「他に治すとこがないから、これ治せなの？」
「まあ、治すべきなのは間違いじゃないからなあ」

そして亭主は、さらに言いにくそうに上目遣いになって、
「それで、さ。　ホケカンの先生が、食事の作り方を指導したいから、お前に来てくれって言ってるんだけど。
　で、あした、2時に一緒に行ってくれないかな・・・」

二つの嫌な予感に、背すじがゾクっと粟立った。
一つは、これからとんでもなく手間のかかる事態になるんじゃないかという、とても的を射た認識で、もう一つは、ここまで亭主を太らせた責任を自分ひとり負わせられるような被害者意識だった。
「食事の作り方を、これから変えろって事？」

つまり、うちのもと王子様は、食物の過剰摂取によって肥満になられ、血液が詰まりやすくもおなりなワケだ。　それを治したら、とにかくホケカンの立場が保てる、会社も組合ににらまれずに済む。
　そして、妻である私は、剣の代わりに入口で鍋と包丁を渡され、こう言われるのだ。
「ようこそ、アナタが勇者です！
　あなたは囚われのもと王子様を救うべく、これからダイエット料理法の修行をなさってクダサイ。
　そして、魔法のように低カロリーのメニューを繰り出して亭主を7キロ痩せさせ、コレステちゃんを半分に減らして健康を招く努力をしなさい。
　そうでないと、陸トドに姿を変えられた王子は、2度と社会へ

出て行くことが出来ないのです」
そして伝説は始まるのであった・・・、って、ちょっと待てよ！！

私は思わず、横目で亭主をにらみつけた。
「・・・えーと・・・とりあえず、ごめん・・・」
亭主に謝ってもらっても、何も改善しない！
なんでこんなことになるの！
休むのは亭主で、働くのは私か！
食べて太ったのは亭主で、作って痩せさせるのは私かよ！

人から見ると、私がおいしい料理を作りすぎた馬鹿な妻だから、私が努力すれば即体重は減る、と言うことになるんだろうか。
でもそれは違うぞ、大きな根本的なミスだぞ。
修行を施してくれる医者は、亭主の肥満が私だけの力で阻止できる物ではない事をわかってない。　こいつが無類の甘い者好きで間食マニアだってことを踏まえた上で、私を修行に導こうとしてるんだろうか。　いやいや、絶対そうじゃない。

忘れもしない小学校2年の給食の時間に、当時クラスメートだった亭主がぜんざいを12杯もお代わりしたことが、今でもクラス会で語り草になってるとか、婚約時代にふたりのクリスマスケーキがカブって2個になってしまったクリスマスイブに、亭主が「しめた」と叫ぶやワンホール丸食いしたとか、結納の時に三つ揃いの背広がパンパンで、お辞儀した途端に弾けてコントみたいなバラバラすだれ状になってしまい、後半から車の中にあったジャージで結納の儀をやったとか、今でも寝る前にポテチ一袋攻略しないと寝ようとしないとか、コーラ代が月々1万2千円かかってるとか、いやーもう出るわ出るわ止まんないくらい言いたいことがある私を、勇者なんかに任命したらもう大変なことになるんじゃないかと思う。　正直、亭主ともめた挙句、こんにゃくを口に詰め込んで殺害しかねないと

思う。

次の日2時、亭主と私は子供たちを私の実家に預けて、夫の運転する車でホケカンに向かった。

余談になるが、私は車の免許を持ってない。

独身時代に取得を考えたが、どうもそういうことが苦手なように思えたので、

「町内の人口を減らしそうだからやめとこうかな」

と、家族や友人に相談したところ、

「人口密度だろ」

とみんなに言われたので断念した。　何がそんなにとんでもないイメージをかもし出しているのかさっぱりわからないが、とにかく刑務所へ行くよりはましと思って不便に耐えることにしたのだ。

でも、この時ばかりは無理にでも取っておいた方がよかったか、と心から後悔、というよりキモを冷やした。　亭主は目まいでまだふらふらしており、かと言ってバスに乗ると手間が惜しく、タクシーでは金が惜しく、なんだかみみっちい性格が仇になってハンドルを握るのをやめられなかった。

直進の時は不便がなかったが、さすがに後ろを振り返りながらのバック駐車は、本人も怖い思いをしたようだった。

ホケカンのお医者様は、アラフォー世代ロマンスグレーの男性だった。　日当たりの悪そうな1階中庭に面した事務所のようなところで、私たちは診断についての説明を受けた。

「コレステロール値と言うものは、異常がなくても年齢と共に上昇して来る物なんです。

でも、というか、だからこそ、というべきか、若い頃からこんなに高い数値が出てしまうと問題なんですよ。

ご本人の話によれば、香川さんはお母様が痩せ型なのにコレステロール値が高かったと言うことですから、これは家族型の高脂血症でしょうね。　遺伝的な要因が強いと見られます」

「遺伝・・・」

「もちろんその遺伝に加えて、それを助長させるような生活習慣もあったと思われますが、もともと家族型の傾向がある場合、スタート位置が高いですので一筋縄では下がりません。　食餌療法をやりながら、薬も併用していくことになります。

それをしなかった場合、ドロドロの血液は血管の中に澱(おり)のようなものを溜め、血管が細くなって血栓を作りそれが詰まってしまうのです。

脳卒中、心筋梗塞、脳梗塞の原因になるのがこういう血液なんです。　今話題の過労死なんてのも、つまりはこういうことで起こります」

「過労死、って、ストレスで起こるんじゃないんですか」

「ストレスというのは原因の種類を言うし、過労死と言うのは結果を総括する言葉で、どちらも病名ではありません。　仕事のストレスや残業による睡眠不足や栄養の偏りや肥満、これによって血液がドロドロになると、脳の血管が詰まって脳梗塞、心臓の血管が詰まって心筋梗塞、破れたら脳卒中とかになる、そしてそれによってなくなった時に、仕事のしすぎだねと言う意味で、過労死と表現するのです。

香川さんの場合、仕事だけが原因でない家族型ですが、だからって何もせずにいればいいかってことじゃないですからね。

このまま放置すれば、香川さんの血管は近いうちに必ず詰まります。　間違いなく詰まります。　絶対に詰まります」

三回も言わんでも。

「そんなにひどい状態なんですか」

「そりゃあもう、尿道から下痢便出すよりひどいです」

ゴン、と鈍い音がした。

あまりにも救いようのない表現に、亭主がデスクに頭をぶつけた音だった。

4、医者に下痢便呼ばわりされる、亭主の血液って・・・・（後書き）

次回は食餌制限の説明等やります。　複雑なのでちょっと作成に時間かかるかもです。

5、世の既婚男性諸君は、奥方がベッドインを拒否するきっかけもしくは理由が

「うーん。　うーん。　うーん」
便秘で苦しむ中年のおっさんの如き低音の唸り声を立てても、一向に出て来ない。
「どうしよう、どうしよう。　あと4時間で寝る時間がゼロだよう」
頭をかきむしって、ひたすら料理本をめくる。
これもダメ。　あれもダメ。　さりとて頭の中だけで構築できるほど慣れてない。

「おい、大丈夫か。　適当でいいぞ、無理しないで」
亭主は助けるつもりで言うのだろうが、えてして男性と言うものは、この種の台詞がとかく妻の逆鱗に触れるものであるということをご存知ない。
「テキトーって何!?　あなた一緒に行ったくせに、何を聞いてたの？
今やってるのは、料理じゃなくて計算なのよ。　カロリー計算。計算ってことは数学なんだから、テキトーとかそれなりとかっていうやり方はないの！」
そんなイラつく口先だけの台詞をしゃべる間に、洗濯物の1枚でも畳んでくれたら有難いのだが、何故だかそういうことはやりたくないものらしい。

先日病院から貰って帰った「食品交換表」と「食事制限の計算表」は、甚だ不親切かつ大雑把な代物だった。　私はもっと現実的に調理方法から教えてもらえるものと思っていたので、一瞬気が遠くなるのを感じた。
それらのプリントや冊子に書いてあることは、ただ単に一日に何

カロリーの何を取らなければならないかと言う事と、そのためにはリンゴなら何個、鯛なら何匹取れるのか、と言うことである。　これは一日に足りなくてもいけないし、多すぎてももちろんいけない。

野菜以外の、魚介や肉類、油や塩分を含む調味料なども、それぞれの分類ごとにカロリーが決まっており、それを過不足なく取らねばならないという。

ということは、まず一日分のメニューを決めて、家庭科の調理実習のように具材を書き出し、計算した上で人数倍してからでないと、実際の料理には取り掛かれないということなのだ。

朝になってからそれをやる時間は当然ながらないから、寝る前の仕事になる。　ところがこれが、用紙を何分間にらんでもさっぱり進まないのである。

１００ｇ×４の野菜と２０ｇ×４の豚肉と８０ｇ×４の芋を、たった小さじ2杯の調味料で味付けできるものなのかが、数字だけ見ても皆目見当がつかない。　とにかく数字をはめ込んでは見るものの、実際に計ってみると、夕食用なのにハンバーグが５ｃｍくらいのお弁当サイズになってしまうことが判明したりする。

手持ちの料理本でグラムを確認しようとしても、ヤツラは野菜ひと鍋煮るのにも肉をどっさり、油をドクドク使っているので味付け的に少しも参考にならない料理がほとんど。　あ、これはあっさり系だわと喜んだら、「仕上げにマヨネーズをひとさじ」なんて平気で書いてあったりする。

大体、手順から違うのである。　普通の主婦は、

「今日はひき肉が安いからハンバーグにしよう」

などとまずメニューを決め、そこから

「たまねぎをこれくらい、付け合せはこの野菜、後はスープに入れるもの・・・」

と、選んで具材が決まって行く。
しかし、食事制限1年生の私の場合、その発想自体を逆転させざるを得ない。
グラムの見当がつかないので、まず野菜を選んで丸むきにし、肉や魚も食べられる部分だけに切ってそれぞれ目方を量り、一日の所要カロリー×人数分に揃える。　もちろん調味料も量る。
それを朝昼晩3食分に分ける。

「さあ、これをどう組み合わせて食い物に仕立て上げるか」
ニンジンさんとダイコンさんとシイタケさんを、しょうゆひとさじとお酒ひとさじだけで調理するメニューは何があるかな？
このお魚を小麦粉ひとさじだけで、油なし塩一つまみで4匹分加熱できる料理ってなんだろう？

料理がなぞなぞになってしまった。　しかも時間制限つきだ。

最初の2日間は、それでも何とかやって行けた。
違った材料を揃えて組み合わせれば、限られた調理法でも違ったメニューになるからだ。
しかし、世界各国から珍しい食材を取り寄せられる大富豪でもない限り、同じ時期に買って来られる食材の種類なんてだかが知れている。
3日もやれば、ほとんど同じ組み合わせが廻ってくる。　それがその後は延々と続くのである。

「うーん、うーん、うーん」
なぞなぞの答えが出て来ないので、深夜1時を回っても私は唸り続けていた。

「おい、もう寝たらどうだ？」
布団にくるまった亭主が、隣の寝室から声をかけて来る。
男サマの辞書では、「もう寝たらどうだ」は、「そろそろ布団に来てくれ」という意味らしい。
ちなみに「布団敷こうか？」は、「布団を敷いてくれ」。「ここ使うのか？」は、「ここを片付けろ」と、日本語に翻訳しなくてはならない。
見れば、すでにエッチなＤＶＤが画面を飾っている。待っている間に眠くなって、もう待てないということらしい。が、当然ながら妻は、「何を考えてやがる」とムッとする。

誰のせいでこんな夜中までメニューに困ってると思ってるんだ！
そこはとりあえず口だけでも、「すまんねえ、苦労かけるねえ」的な台詞を吐いても罰は当たらないのではないのか？
当然のように「ベッドでのご奉仕」を要求するかのごときこの台詞と態度に、さすがの「もと夢見る乙女」もプツンと切れてしまったのである。

「当分無理だって！
まだこれから洗濯物たたんで片さなきゃなんないから、２時半に終ればいいとこだよ。寝る時間ゼロになるからパスパス」
「昼間にやっとけばいいのに。せっかく俺が家にいて、チビたちを見てるんだぜ」
「昼間あ！？」
昼間だって料理だ。亭主は確かに子供の遊び相手だけは、進んでやってくれている。でも、メニューを考えるのに２時間、実際の調理と片付けに、慣れない私は１食２時間半ずつかかっていた。合計して、食事にかける時間は１日９時間だ。加えて一般的な掃除洗濯の家事と、遊ぶ以外の子供の世話も平行してやる訳だから、睡眠時間がすでに健康上の危険区域に入っている。

昼間もくそもあるか、エッチしてる暇があるわけねーだろ！！

大体、ビデオのお世話になって済むことなら、この際ひとりでやって欲しいもんだ。　まさか、ベッドに誘えば私が大喜びで飛んで行って、疲れもストレスも解消、ダンナサマに大感謝！なんてことになるとでも思ってるんだろうか？

さすがにそこまで口に出しては言わないが、ＭＡＸで自分の楽しみを優先されている気がして、とにかく気に入らない私はついつい大声を出す。

「あのねえ！　今回のことで、私の仕事は3倍以上に増えたのよ！　協力するのが無理なら、ちょっとは理解ぐらいしたらどうよ？」

「仕事？・・・仕事でやってるのか」

亭主は信じられない部分に反応した。

「仕事じゃないだろう？　愛情でしてるんだろう？」

口をきく気力が急速に失せた。　全身からレーザービームとウルトラシュレッダーと魔人エレメント光線を発射して亭主を攻撃したくなった。

「愛するダンナサマが、一日でも早く健康を取り戻すために、アタクシ頑張ってダイエットメニューを作るわ！！」

いや、そういう気持ちはないわけではない。　でも家事の全てが、愛情の成分で出来ているとは思ってないし、思われたくもない。溢れる愛情を持て余してそれを行為に変換したのが家事なのだというだけの解釈で、この２４時間３６５日の重労働を語ってくれたらたまらない。

男の人だって、家族のために働いていることは事実でも、「これは仕事じゃなくて愛情だ」とは呼ばないだろう。

「愛情をこめて仕事をしている」もしくは「愛情を糧に、仕事を

頑張っている」のだ。　それとこれとはまったく別の事なのだ。

亭主はわが子とは違う。

子供の離乳食を必死で作る母親の献身と、今度のことは意識の上で根本的に違うのだ。　パートナーと共存するための分業なのだ。

そこをわかってもらえなければ、こんな割の合わない生活など到底やっていけない。

私はエッチビデオを流し続けるテレビ画面に歩み寄った。

「おねーさんがた、うちの亭主をよろしくお世話してください。いい仕事お願いしますよ！！」

ベッドでアハアハあえいでいる裸のおねーさんに、わざとらしく頭を下げ、ポカンとしている亭主を無視して、思い切り寝室の扉を閉めた。

当分、エッチなんかしてやるもんか！！！！

5、世の既婚男性諸君は、奥方がベッドインを拒否するきっかけもしくは理由が

しばらく間が開いてしまいました。　第5話でございます。
知人で糖尿病食を作っている主婦仲間も、膵炎の父を世話したうちの母親も、同じようなことでキレてました。全ての苦労してる主婦の本音のところだと思います。
そうは言いながらも、みんな頑張っているし亭主を愛しております。奥さんがんばれ！

さて次回は、亭主のその後の体調について書きます。

6、一人相撲！　その空しさのあまり、妻はついに魔女になってしまうのだった

なかなか治まらぬ目まいに鬱々と日を過ごす亭主のもとに、会社から正式な出勤停止命令が届けられた。

ホケカンの有難いご指導により、その期間の具体的な数字も示されていた。

すなわち、亭主の体重が後7キロ減るか、コレステロール値が正常値に戻るか、ウェストが２０センチ減るか。“そのどれかが実現したとホケカンが認めた時に、出社を許可する”と書かれていたのだ。

「コレステロール値」「体重」「ウェスト周り」と3個も項目を設けてあるのに、肝心の“目まいが治まるまで”という項目がないのは、なんとかしてハードルを高くしたいという、会社の切なる願いの表れであると思われる。　めまいという症状だけなら、まかり間違って明日にでも突然治ってしまうかもしれない。　何しろ原因がわからないままなのだから、たった数日で出社が叶ってしまっては、万が一にも再発した時に具合が悪かろうということなのだ。

この書類によって、私達夫婦の新しい生活形式が決まった。　主婦である私が、日がな1日唸りながら食材をこねくり回し、目まい持ちの亭主は「食っちゃ寝で短期間7キロダイエット」という、ありえない目標に挑む、という悪夢の形に、である。

断食ダイエットというのなら、ゴロゴロしていても少しは何とかなる気がする。　空腹感という物はあまりに長時間に及ぶと麻痺して感じにくくなってしまうからだ。

また、外で忙しく過ごすのなら、一時的に空腹を忘れてしまうと

いうこともありえる。　しかしそのどちらでもなく、食べては横になっていると、『ああ腹減ったな』しか考えることはなくなってしまうのだ。　「3度の飯より食べることが好きです」という、訳のわからない自己紹介をした事のある我が家の王子様が、この状態に長いこと耐えられる筈がない。

それでも当初、亭主も厳しく節制をしていた。　何故なら、目まいがひどくて酔っ払ったような状態になり、著しくも有難い食欲減退に苦しんでいたからである。　この調子で行けば、2ヶ月たたずに出社が叶うかもしれない、そうすると有給消化分で給料カットは免れるのではないか、と妻は内心嬉しい計算をしていた、のだが。

医学というものは時に余計なことをしてくれる。　約2週間たったところで、大変なことが判明したのだ。

「耳鼻科に行ってみられたらどうでしょう」

ホケカンからの紹介で精密検査に行った総合病院で、脳に異常を認めないという結論を出した後、内科の先生がそんなことを言い出した。　それまであまりにコレステロールや血圧の異常に気を取られるあまり、脳に血栓が出来たという想定でしか検査をしていなかった病院側が、方向性を改めたのである。

「時々、三半規管の異常で目まいを訴えられる方もいらっしゃいますよ」

耳の異常くらいでこんなひどい症状にはならないだろう、と無知な夫婦は鼻で笑いながら、それでも紹介状を持って市内の耳鼻科を訪れた。

「メニエール病ですね」

聞いた事のない病名を告げられた。

「安静にしているだけで自然に治りますが、あまり繰り返すよう

だと聴力が衰えることもあります。　まだ原因がはっきりとはわかっていないので、治療も発展途上なのですが、症状を抑える薬はありますから。　それと食事が取りやすいように吐き気止めを出しておきましょう」

医者に食い下がって質問をしてみると、やはり三半規管の誤作動のような現象であること、内耳に余分なリンパ液が溜まるために起こるのではないかと言われていること、ストレスで悪化したり発病したりすると考えられていることなどを説明された。

なんなのだこれは。

愕然とした。

なんなのだいったい。　要するに、体重もコレステロールも関係ないじゃないか！

あいた口が塞がらなくなって、夫婦して豚の蚊取り線香入れみたいな顔になって家に帰って来た。

貰って来た薬を飲んで2日ほど安静にしていたところ、目まいも吐き気もきれいさっぱり無くなってしまった。　亭主は久しぶりにおいしくご飯が食べられて喜んでいたが、そうなると、もはや量を抑えることは難しくなって来る。

結局間違いであったのだから、体重を落とさなくても出社させて欲しいと上司に願い出たのだが、それは難しいとの返事。

会社と言うのは大きな組織なので、一度正式に出た指令書を取り下げるのは至難の業であるらしい。　ましてや、ホケカンが「危険がなくなった」ことを承認しない場合は尚更だ。

なにしろ、「危険数値」であることは事実なのである。　こうな

ったら、やはり数値を下げてから出社するのでないと、もしも今後本当に脳卒中か何かで亭主が倒れたりした時に、何を言われるかわからないから、会社も安易に首を縦に振るわけには行かないのだった。

亭主のダイエット熱はあっさり冷めてしまったが、まさか痩せませんと宣言するわけに行かないから、頑張るよと口で言いながら陰で間食などを楽しむようになった。　食事制限をやめる理由はないので、相変わらず四苦八苦しながら献立を考えている私を横目で見ながら、こっそり子供のお菓子などをつまんで食べている。　そのうち自分の部屋で、買い置きしたスナック菓子などを大量に食べるようになった。

咎めると、

「平気平気、目まいがなくなったんだから、その分運動すれば減量するさ。

仕事がない分、毎日マラソンをするよ」

そう言って家のまわりを2時間走って戻っては、

「腹が減った腹が減った」

と言って大量に間食を採る。

ポテトチップ1袋分のカロリーを使うために何時間走ればいいのか？

それを取り戻すだけの減量食を作るのに、また何時間悩まねばならないのか？

野菜の煮物が入った鍋をかき回しながら、ふと、この中に吐き気

のする薬をぶち込んでやったら、ダイエットなんて簡単なんじゃないかと思った。
吐き気止めがあるのだから、逆の作用がある薬も作れるのじゃないか。　そんな薬をいつもいつもひと垂らしずつ、亭主の煮物に入れておく。　どんなにカロリーを採っても太らない、夢の食事が簡単にできる。
ふふふふ。　さあおいしい煮つけが出来たわよ。
やけくそになって、おとぎ話の魔女のように笑いながら、ぐるぐると鍋をかき回した。

耳鼻科の先生には申し訳ないが、メニエールの原因がストレスなんてありえない。　うちの亭主の心臓には、血栓の変わりに剛毛が生じているに違いないからだ。

6、一人相撲！　その空しさのあまり、妻はついに魔女になってしまうのだった

毎度気まぐれな更新ですみません。　エッセイ調の物は、書く気になる環境が整わないといまいちノリが悪く、テンション保つのが難しいですね。　その種のものを長く描き続けておられる先生方に脱帽です。

7、キッチンに神様は存在しないから、主婦の聖剣は銀色の計量スプーンだけな

「ダイエット食作ってるんだって？
ねえ、シュ〇ーカットって効果ある？」
そう聞かれたんである。

主婦という生き物は、人間関係の濁流から身を守るために常に井戸端会議を必要としているので、情報が知れ渡るのが驚くほど早い。
とりわけ社宅というやつは、どこのご主人が何時に出勤していただの、最近はバイクをやめて自転車にしているだの、油断すると女房よりもお隣さんの方がよく知っていることがあるくらいだから、うちの最愛の亭主殿がここのところ出社せず昼間も家にいる、という噂は、すでに細胞内の細胞液のように確実に社宅中を満たしていた。

比較的親しくしている町田さんの奥さんに欠勤の理由を聞かれて、簡単に事情を説明したのが一昨日の事。
その情報が羽ばたいて、私が大の苦手と敬遠している紺野ばばあに達するまでたった2日しかかからないのだから、社宅スズメさんたちは恐ろしい。
それにしても、いきなりシュ〇ーカットの効用を聞かれるとは思わなかった。
私の感覚から言うと、今うちでやっているのは食餌療法であって、ダイエット食というのとは微妙に違う。　美容のためにすることではないからだ。

ただ痩せさえすればいいのであれば、断食をするとかリンゴしか食べないとか、効果がありそうな食品を足して食べることも試たりするだろうが、食餌療法というのはカロリーの調整を行うことなの

で、合成甘味料を使うと言う考えに至るまでに、まだまだやることがあるという感じなのである。　こんなに減らしたのに効果がない、それじゃどうすればいいのか、と悩んで初めて、それでは砂糖を合成甘味料に代えてみるか、飲み物を漢方茶にしてみるか、という話になるので、今の私にはその前にまともに制限食を作る事しか考えられない訳だ。

シュ〇ーカットは甘味料であるから、本来こいつのお仕事は、食事に甘みを加えることのはずだ。

だから「効果ある？」と聞かれて、咄嗟に

「友達の家で使ったことがありますが、結構甘くなるんですよね」

と答えた私は、やはりずれていたのだろう。　紺野ばばあは、あきれたように鼻の穴を膨らませて私の肩を小突いた。

「馬鹿ね！　痩せるかどうか聞いてるんじゃないの！」

始めたばかりの人間に、痩せましたかと聞くのもどうかと思うのだが。

大体、痩身剤ではないのだから、使えば痩せるというものでもないだろう。　答えに困っていると更に畳み掛けるように聞かれた。

「じゃああれはどうなの、テフロンのフライパン。　あれ使うと痩せるんじゃないの？」

それも痩身具ではありません。

道具を過信してはいけない。　というより、この感覚はすでに痩身具を飛び越して、「魔除け」の域に入っているのではないかと思う。

テフロンのフライパンを使うと、神様のご加護で体重が落ちる。

シュ〇ーカットをひとさじ加えれば、悪魔デブリンが退散するので痩せることができる。

こう書くと、誰でも馬鹿かと思うだろうが、実際それに近い感覚

で道具や食材を購入する人は多い。
買って使って痩せようとする意欲は大事だ。　でも、問題はどのくらい何が減っているかを、ちゃんと把握することなのだ。
主婦である私が、のた打ち回ったあげく身に染みてわかったこと。
キッチンに神様なんていない！　お守りなんて存在しない！
そこで最も神に近い存在は、この私だった。　私が計画し、私が生み出す食べ物が、家族を生かしまた殺すのだ。

確かに我が家でも、テフロンのフライパンを使っている。
でも油を使わないわけではない。　具体的な調理については後々上げて行くが、全く油を使わないのであれば、そもそもフライパンを使う理由がほとんどないではないか。　チャーハンをノンオイルでするなら、それは混ぜご飯になるし、ポークソテーを油なしでするのなら、オーブン焼きでも大差ない。
だから、炒めものをするとき、我が家ではちゃんと油をひく。
たくさんは入れられないので、一回につき大匙いっぱいだけと決め、一日にそれを二回しかやらないと決めて。

減量を志す主婦の方々の多くが、テフロンのフライパンはお買い上げになっても、大匙いっぱいのサラダ油を熱いフライパンに投入した時にどのくらいの量になるのかをご存じない。　それじゃ広がらないでしょうとおっしゃる。　計ったことがないわけだ。
実際にやってみると、油は熱い物の上では薄く広がるので、大匙いっぱいの油があればフライパンに一通りの油の膜はできるし、なおかつ控えめながら波打つくらいの量がある。　ただしこれに、乾いた生の材料をガバチョと投入してしまうと、吸い込まれてしまってちょっと足らない感じになる。
それを避けるために、私は具材にレンジで軽く火を通し、バットに広げて水けを切ってから投入する。
そうすると不必要に油を吸い込まないので、油は材料表面に軽く

絡むだけで全体に行き渡る。

油でも砂糖でも何でも同じで、まず計ることから始めないと、減らしようがないという事に気付かなくてはならない。

私は食餌制限を始めるにあたって、いの一番に計量スプーンを大量に準備した。

これもやってみると判るのだが、油を計ってすぐ砂糖を計り、1分後に醤油と小麦粉をそれぞれ図ろうと思ったら、スプーンを洗ってばかりで時間がいくらでも経ってしまうのである。　面倒なことはいつまでも続かないから、そのうち目分量になっていい加減になる。

だからと言って、わざわざ計量スプーンをいくつも買う必要はない。　まず一つだけ買い、それで水を一杯計って、その水を小さいお玉や洗剤を計るスコップみたいな形の物に入れて、印をつけておけばいいのだ。これを5つ6つキッチンに転がしておくだけで、計量にかかる手間はかなり違う。

そしてまず道具よりも、何をおいてもメニューの工夫である。

油を使わない料理を作るのは、テフロンのフライパンを買うよりも簡単だ。

1、グリル焼き、オーブン焼き
2、蒸し物
3、煮物
4、汁物、椀物
5、和え物

これで5品も揃うではないか。　わざわざフライパンで、油のないチャーハンを作って「混ぜご飯」なんて呼ばれるよりもよっぽどスマートだ。

加えて、最近ではレンジ料理がとても充実している。　医者からカロリー制限を申し渡された日、台所に立って途方に暮れた私が咄嗟に頼ったのは、オーブンレンジを買った時に取扱説明書と一緒についてきた料理ブックだった。　ミートローフ、ローストポーク、ココット、鳥の照り焼きなど、子供たちでも好きになれる料理がたくさん載っていて、それがすべてノンオイルで出来ると判って本当にほっとしたのである。

「アイスケーキを作るのにシュ〇ーカットを使ったのよね。　でもあまり甘くないもんだから、何倍も入れたらお腹が緩くなっちゃって。　でも下痢したら痩せるからいいわよね。　今日から抹茶ミルク作るときもこれにすることにしたわ、どうせ下痢はするんだし」

何か2重3重に間違えている気がするのだけど、紺野ばばあは人の話を聞く人ではないから放っておくことにした。

8、3か月の間に魔女の鍋から生み出された実際のメニューと、病身の王子がた

私のメニュー作りの方は、ひと月目くらいでかなり楽になった。
これは、いわゆる「慣れ」によるものだ。　どれくらいの量を一日に採れるかの目安が頭に入り、定番やローテーションのメニューも出来て来たし、豆腐のように決まった大きさのものはいちいち計らなくても見ただけでカロリーが判るようになったのだ。
その代りに訪れたのは、恐ろしいほどの「メニューのマンネリ化」である。
2か月めから早くも、あれは昨日やったこれは一昨日やった、それは先週やった、という現象が起き始めた。　普通の主婦でさえ、年がら年中この状態に苦しんでいると言うのに、我が家には計算上作れないメニューがごまんとあるのだ。　料理本を一冊購入しても、まともに使えるのは2品くらいという事が多かった。

私は暇さえあれば新聞や雑誌を切り抜き、テレビのお料理コーナーをチェックしてスクラップブックを作った。　それを丁寧にファイリングして、肉が主体の物、野菜が主体の物、魚が主体の物、その他の物に分けて一冊ずつ分類したものにし、これをさらに具材別に検索できるようにした。　当時はパソコンがなかったから、全部クリアファイルに手作りだ。
ここまで手間をかけたのは、私が几帳面だからではない。　我が家では先に具材が決まってからメニューをひねり出す「なぞなぞ調理」だから、具材から検索できない限り、メニューブックが全く役に立たないのだ。
「今日は何を作ろうかな」と思って緩慢に検索するのではなく、既に切って皮を剥いて山積みしてある素材を、どう処理しようかと検討するための特殊な料理本が必要なのである。

自分で考案した料理もレシピに加えた。
これは今見ても大したものだと思う物が結構ある。　我が家だから開発に至ったのだが、他の家庭でもおいしく食べられるだろうと言う種類のものだ。
少々脱線になるが、2、3面白い物を紹介してみよう。

☆巨大ロールキャベツ☆

ロールキャベツは普通に作ってもカロリー内で出来るのだが、この中には挽肉以外に玉ねぎも入っているし、キャベツの葉も人数の2~3倍の枚数が要る。　我が家の計算では、キャベツも玉ねぎも淡色野菜で同じ仲間なので、ロールキャベツ1品で夕食の淡色野菜を全部使い切ってしまうことがある。
そうなると、一緒に出す味噌汁に大根も入れられないしサラダはホウレンソウと人参の緑黄色トリオだけ。　いやキュウリも欲しいだろう？　と思っても入れることができない。　だいたい、たったひと品にこんなに野菜と肉を使ったら、あとのメニューに困るのだ。
ごはんとロールキャベツだけで夕飯になるか？
それで発明したのがこの巨大ロール。
普通のロールキャベツと同じようにハンバーグだねを作ったら、家族全員のぶんを一度にボール状にして、キャベツの葉で巻き、巨大な一つの球にしてしまうのだ。　これならキャベツの葉は5枚くらいで済む。
それだけでは煮込んだ時にバラバラになるから、アルミホイルでぐるぐる巻きにして、箸の先などで前面に穴をあけ、汁がしみ込みやすくする。　そいつを汁の中に投下して、火が通るまで煮込めばいい。
食べる時はアルミを剥がし、包丁でスイカのように切る。　なか

なか豪快で見栄えもするので重宝だ。

☆ニンジン寒☆

つまるところ、すりおろしニンジンの入った牛乳寒である。
牛乳の中に、おろし金でおろした生のニンジンを入れて冷やし、固めたら完成という、単純で簡単な料理だ。　ニンジンがまるまる一本入っていても簡単に食べられるし、乳製品も採れる、砂糖も油も不要の優れもの。　一皿増えて食卓もにぎわう。
ただし、この料理が変わっているのは、それを「わさびじょうゆ」で食べる、というところにある。
最初聞いた人は間違いなく「げー」と発音するだけでコメントしなくなる。　牛乳に醤油をかけることに抵抗があるためだ。
しかし、一度やると案外ノープロブレム。　やみつきになる夏の逸品である。

☆薄切り肉の円盤☆

野菜と一緒に炒めると雑然として見えるばかりか、油も何段階かに分けて掛けたりして高カロリーになる肉炒めを一変、肉をフライパンに敷き詰めてピザのように焼き固め、野菜中華あんの様な物をかけて大皿に盛ると、同じ具材でごちそうに見えるし、ひとり分がどれくらいかよくわかるので食べ過ぎないで済む。　肉は同じ厚さになるようにフライパンに全部並べてから火を点け、裏表を焼く。
そのほか、千切り野菜をふわふわに盛り付けて大量に見せ、食卓

の上を賑やかにしてみたり、先に乾煎りして茶色くなったパン粉を使って、油で揚げずにオーブンでトンカツを作ったり、前の食事のスープからちょっと汁を失敬しておいて、それでソースを薄める姑息な努力をしたり、あらゆる方法で我が家のカロリーは無理やり数字通りに計算されて行った。

悩みの種は、まだ小さい2人の子供たちが、野菜ばかりの料理をあまり歓迎しなかったという事だ。

子供の口に合うメニューもかなり開発したのだが、一日の摂取量の4分の3が野菜では、さすがに幼児の好みをカバーしきれない。

かと言って子供の食事だけ別に作る余裕もないし、遺伝的な病気ですと言われたからには、将来普通の食事に戻せる見込みはないのだから、そんな刹那的なことをやっていたら子供の栄養摂取もいい加減になってしまうだろう。

食べにくい野菜だけの料理を、涙目になって食べる子供たちには申し訳なかったが、我が家の調理に慣れてもらうしか方法がない。

泣いても吐き出しても、時間をかけて残さず食べさせることにした。

その子供たちの苦しむ様子も、私のストレスになって行った。

メニエール病から来る目まいと吐き気のため、亭主の体重は一時的に4？減ったが、耳鼻科の有難いお導きで目まいが治まると、体重はさっぱり減らなくなった。　食事ができるようになると同時に間食の習慣が戻ってしまったためである。

それでも食事の内容が変わって低カロリーになっていたので、リバウンドは避けられた。

亭主はこれで安心してしまった。　食べても増えないことが判ったからである。
この男サマの頭の中では、「この魔法の食事をしていれば体重が増えることはないから、ある程度間食をしても大丈夫。　運動は好きなのだから、体を動かしていればその分で痩せることができるだろう」という計算が働いてしまったものらしい。

食事を作る側としてはたまったもんではない。　こっちは倒れる寸前まで無理をして、メニューと格闘しているのだ。　本人が全力で痩せようとしてくれなくてどうなると言うのだ。
大体、仕事を休んでまで痩せることに専念しているはずの人間がどうやったら菓子類をあんなにたくさん買って来る気になるものだろう。　取りあえず有給扱いになってはいても、休みが長引けば給料はなくなってしまう。　それがわかっていながら、復帰に真剣にならない亭主に私は腹を立てていた。

大体、食餌療法は決まった時間に決まった量を食べるから効果がある。　それを、イレギュラーで間食ありにされてしまったら、「お腹がすく→食べる」という、あり得ない道筋が出来てしまう、これが一番どうしようもない話なのだ。
カロリーの少ない食事は、その時どんなに量が多く見えるメニューを工夫していても、結局お腹がすくのは早い。　ワカメやキノコなどノンカロリーの食材をを大量に投入し、これでもかというだけ食べさせても、熱量分が燃え尽きてしまうと、やはり空腹感はやってきてしまうのだ。　それを、次の食事まで我慢して初めて、前の食事分の減量ができたことになるのである。

ところが、亭主はこの「空腹感」を少しも克服できなかった。
長女の蘭は、ある日新しいフレーズで私を唖然とさせた。

「とーさん、怒ってるの。　早くごはんにしようよ」
亭主は空腹になるとイライラして、些細なことでも必要以上に子供たちを叱る。　食事前にテーブルの上が片づけてないとか、テレビを見ていて蘭が支度に協力しない場合には、重犯罪でも犯したかのように怒鳴りつけ、散らかしたおもちゃを捨てたりテレビをコンセントごと消してしまったりする。
子供の直感は侮れない。　蘭は、父の怒りがしつけのためでなく空腹のためにエスカレートしていることをきちんと把握していた。
そして、何かしでかして亭主に叱られるたびに私の所にやって来て、食事を急いでとに頼むようになったのである。

空腹感を克服せず内緒で間食をしていると、「お腹がすくたびに食べて」しまう。　これでは毎食毎食、少しも「減らした」ことを体が実感しないので、体質自体変わって行かない。　従っていつまで経っても、空腹感が来るたびにリアルにつらいのである。

とは言っても亭主にも、下痢便血液の危機感はそれなりにあったらしく、運動をやるとの宣言通り、実に熱心に体を動かした。
朝起きると1時間、家の周りをジョギングし、昼すぎると2つ隣の町のビデオショップまでマラソンをして、ビデオを一本借りて帰って来る。　このビデオをダビングしたらその日のうちに返さなくてはならないので、夜までにもう一度マラソンをやるわけだ。
地域のスポーツ交流にも参加をし、小学校の体育館で週2回のバドミントンをやる。　社宅で作っていた野球チームの練習や試合にも、進んで出るようになった。

しかし、一日中体を動かしていても、間食をするので思うように

体重を減らすことができない。
おまけに、運動にはひとつのリスクが付きまとうものである。
けがをする、というリスクだ。

亭主は下痢便血液の診断を受けて以来、血流を良くするための薬を飲んでいた。
この薬、血液をさらされにしてくれると言えば有難いことに聞こえるのだが、そうは言いきれない面もあった。　言ってしまえば「血が固まりにくくなる薬」だったのである。

休職から3か月めのある日、事件は起こった。
「おい、驚くなよ。　卒倒するなよ」
野球の試合に出かけた亭主から、暗号もかくやと思うような謎の電話がかかった。　そして30分後、車で送られて帰宅した亭主は、足の代わりにスイカを生やしていた。

左足がパンパンに腫れて、巨大なスイカを2つつなげたようにしか見えなくなっていたのである。
「試合中に僕とぶつかったんですけど、内出血したらしくて、中で血が止まらないんです」
車で送ってくれたチームメイトの男性が、青い顔をして謝罪した。
大した打ち身ではないはずなのに、この「腫れ」のひどさのために、亭主は10日以上もの間、歩けなくなってしまったのである。

9、動いていても太るのに、動けなくなったらどれくらい太るんだろう

小学校時代の同級生で、舟木と言う男がいる。
私と亭主の共通の友人である彼は、同じ町内に家を建てて仕事も町内でしている。
夫婦して地元に住みついていれば、そういう友人も彼一人ではないのだが、この舟木は我が家にとって特別無比な存在だった。
彼の仕事は接骨医である。
町内で一番人気の接骨院を開業しており、わが亭主は長年患って来たヘルニアのために、定期的にこの友人の世話にならなければ生活できない状態なのである。

舟木は秀才で愛想が良く、眉目秀麗とまでは行かないまでも、そこそこ見栄えのする容姿で、昔から女子に人気があった。
しかし、そんな長所など鼻で吹き飛ばしたくなるほどの、重大な欠点がこの男にはあったのである。

「おお、来たか一平。　待ちわびたぞ、ガラスの腰よ！」
受付に亭主が顔を覗かせるや、舟木は大声で叫んで芝居気たっぷりに両手を広げた。
「最近はお前のその腰が、我が家の生活を支えてくれてるようなものなんだ。　もっと頻繁に壊してくれなきゃ、息子の保育料が払えんじゃないか」

そう。　彼の口には、毒性は少ないが無駄にたくさんの棘が生えていた。
そこから生じる台詞は皮肉に満ちていて、しかも油が乗って来る

に連れて、次第にえげつないシモネタへと変貌を遂げることでも有名だった。

「悪いけど、今日は腰じゃないんだ」

亭主は曲がらない足を苦労して、診察台の上に持ち上げた。

舟木は目を丸くして、パンパンに腫れた足を眺め、

「どこの魔女に呪われたんだ？」

と真顔で尋ねた。

亭主は状況を細かく説明した後、

「試合会場に近所の外科医が待機してたんだが、診察した時は骨に異常はないだろうって話だったぜ。

まあ、その時はこんなに腫れてなかったし」

亭主が頭を掻いた。　要するに、こんなことになるとは夢にも思わなかったので、高脂血症の薬を服用しているという事をその医者に伝え忘れたらしい。

「見た目に出血してれば思い出したんだろうがな。

内出血も、その時はほとんど青くなってなかったから、血のことなんかさっぱり忘れてた」

取りあえず湿布をしておくことになり、準備をする間に、舟木は私を手招いた。

「きょんきょん、ちょっとちょっと」

「きょんきょん言うな！　さすがの亭主ももうそんな呼び方はしとらんわ！」

「源氏名で呼ばれたからってあせるなよ」

「どこが源氏名か！！」

中学生かと言うような馬鹿丸出しの会話をしたあと、舟木は真顔

になって、茶色の封筒を差し出した。
「念のために、骨折は疑った方がいいと思うよ。
こういう症状の中にまれに、実は折れてましたっていうことがあるからね。
一応、呪いを払うためにお札(ふだ)を作った。　日曜でもやってるとこだし、電話も入れとくから、今から行ってお祓いしてもらっておいで」
「お、お祓い？」
「最新機器があるんだ。　体の中の悪魔を映してくれると言う、実に便利な」
「レントゲンかよ！！」
「そうとも言う」

いくら接骨院は病院と違うから、難解な医学用語を羅列しないとこがいいんだ、と普段から豪語しているとは言っても、もう少し文化的な表現をしないと、明治維新以降の人間にはわかりにくくてしょうがない。
舟木の接骨院では、骨の異常が判らない場合があるので、万が一を考えて、外科でレントゲンを撮ってもらえ。　彼の台詞を翻訳するとそういうことになるらしかった。

「12時半までなら診てくれるってさ。
そういうことで一平、腰の治療はまた次の時な。
あちこち壊れてるんだから、無理してきょんきょんを持ち上げるなよ」
冗談の通じない亭主は、舟木の言葉の意味が解らず、目をしばたたかせて言った。
「こんなもんを持ち上げてどうする」
こんなもんとは何事か。

「へえ、一平はそんなにいろいろやってるのか。
俺なんか、持ち上げると言ったら駅弁くらいのもんだけどなー」
「駅弁？」
「はいはいはい、どうもお世話になりましたああ！」
聞くに堪えない下ネタになって来そうなので、慌てて舟木から亭主をもぎ取って接骨院を出た。

紹介してもらった外科医院は、個人経営にしてはかなり大きく、設備も整った病院だった。
そこで1時間ばかり入念な検査の結果、私たちからすると親くらいの年代の男性医師が診断を下した。
「骨にも筋にも筋肉にも異常なし。
腫れは純粋に内出血のためですので、出血が止まれば次第に元に戻ります」

医師の説明によれば、血管を出てしまった血液は、こちらで戻すことも消すこともできないのだそうだ。　放置して体内に吸収されるのを気長に待つしかない。
「それはどのくらいかかるんですか」
「出血量にもよるし、吸収にも個人差があるから、はっきり何日とは言えませんが、１０日から2週間くらいで元に戻るのが普通でしょうかね。　まあ、腫れは段々引いて行くので、そのどこら辺で治ったことにするかも問題なんですがね」
「どこらへんで動かしてもいいもんなんですか」
「それは、1週間くらいしてもう一度来てもらって、診察してから判断しましょう。
その間、無理に動かして出血したら元も子もないので、ギプスで覆って置きましょうね」

ギプスだと？

私たちは仰天した。　何しろ普通のサイズの足ではない、スイカの足なのだ。　よく皮膚が足りてるなと感心するくらい巨大化した足なのだ。　ギプスなしの今でさえ、股間の物は一体どういう状態でどこに押しやられてるんだろうと、傍から密かに心配してあげているくらい、ボッテボテに腫れまくった足なのだ。

それをさらにギプスで囲んだら、一体どういう状態になるんだろう。

スイカを段ボール詰めして履いてる状態になるのではないか。

つまり1週間の間、全く機動性はなくなる、もっと端的に言えば、寝たまま身動き取れなくなる。

「おっしゃる通りです。　ご主人、しばらく会社を休めますか？」

いや、会社はもう休みっぱなしに休んでいるわけで、問題は休めるかどうかではなく、いつになったら出勤できるかなのですが。

えらいことになった。

そもそも島根出張からこっち、えらいことになりっ放しの私たちなのだが、まだ更に落ちる先があったとは思わなかった。　ピンチが続きすぎてどれが致命傷かわからなくなりそうだ。

私は心の中で叫んだ。

「まずい。　この上動けなくなったら、間違いなく太る！！」

亭主が前回動けなくなった時は、メニエールの目まいが原因だったので、食欲も一緒に失っていた。　だから太る気遣いをしなくてよかったのだが、今回は違う。　亭主は元気で食欲がある。　ホントに食欲ばかりは、無意味に無駄に無慈悲に無神経に、冬眠から覚めた熊より旺盛にある。

その割に学習意欲はまるでなく、私が苦労して１８００ｋｃａｌ（キロカロリー）

に減らした食事を、間食で３５００ｋｃａｌまで引き上げ、
「ちょっとつまんだだけなのに、なんで食事よりもおやつの方がカロリー多いんだ？
ポテトチップって芋だから野菜じゃないのか」
と呆けたことを今更のたまい、揚句に、
「まあいい、その分動くから文句ないだろう」
と豪語して、朝１時間、夜２時間走って戻って来るやまた間食をした男である。

その亭主が、これから最短でも１０日間、走るのはおろか歩くこともしなくなる！
しかも食べる暇は死ぬほど（ただの表現ではなく、ホントに死に至るほど）あるのだ！！

「ねえ、つかぬ事を伺いますが、有給ってあと何日くらいあるんでしょうか」
帰りのタクシーの中でムスッとして物を言わなくなった亭主に恐る恐る尋ねてみた。
「あと１８日あるよ。　だいぶたまってたから」
「あと１８日しかないのね」
「言い直すな」
「だってそのうち１０日は動けないのよ。
残りの８日で７キロ痩せなかったら、その後は給料カットでしょう」
「しょうがないだろう、予想外の事なんだから」
私は亭主の顔をまじまじと見直した。　ということは、この調子でやっていたら、あと１８日で７キロ痩せることは出来る予定だったという事なのか。

「できるよ。　だってメニエールの時に食べなかったら、3日で2キロ落ちたじゃないか。
　それで行くと6日で4キロ、9日で8キロだから、8日目くらいに病院に行って体重計ってもらえばOKだろ」
「あーたはボクサーか！！」

笑い話ではない。　今のようにダイエットブームになる前の時代である。　痩せる苦労を知らない人はたくさんいた。　女の子は、そうは言ってもスタイルをよくするためにいろいろ頑張った経験があるので話が通りやすいのだが、男性のダイエットに関する認識は薄く、「明日のジョー」あたりから仕入れた方法が有効と思い込む男性もまだいたわけである。　とはいえ、亭主のこれは極端すぎる勘違いだったが。

一度でも痩せようとしたことのある人はよくおわかりだろう。
食生活を変え、摂取カロリーを落とすと、最初の2キロくらいはストンと落ちる。　この2キロは、例えば下痢をしたとか、体調不良で食べられなかったとかいった健康トラブルでも簡単に落ちる。
　これは体が、従来の食生活のリズムに従ってカロリー消費をしているため、摂取量が落ちた分だけマイナスになるから起こる事である。　奥さんが、旦那の収入が減ったのを気づかずに買い物をしている状態と思ってもらえばいい。
　でも、家計簿を見て奥さんはそのうち青くなる。　このままでは今月赤字だわ、やだもう、夕食はもやしいためにしよう！
　それと同じで体はすぐに気付くのだ。　まずい、このままでは飢えて死んでしまう。　飢餓状態に備えて、消費カロリーを落とさねば、と。

かくして、2キロ3キロ落ちた後は、めっきり体重が減らなくな

る。
　それでもそこであきらめずに、この状態を1か月、2か月と続けることによって、体が一時的な飢餓状態に備えるガードを外すと、体重は再び少しずつ減って行くのだ。
　そういうシステムを全く理解しないお殿様ダイエッターであった亭主は、有給休暇を存分に楽しんでから、一気に地獄の絶食による職場復帰を狙っていたのである。
　さすがに本人も、失敗に対する後悔があったと見えて、口には出さないがこのあとずっと不機嫌だった。

　さて。
　こうして、わが最愛の亭主は寝たきり生活に突入した。
　それは、この先に待ち受けている、超絶最低の金欠生活の幕開けでもあったのだった。

１０、時間はない、亭主はイラつく、みんな貧乏が悪いんである

「ばんごはん、つくります。　トントントントン」
「ママー、きょうはなんのごはん？」
「もやしのいためものよ」
「えー。　もやしきらいー」
「だめよ、もやしはやすいんだから。
　こんなにいっぱいたべて、たったの３０えんよ！」

蘭の一人遊びが、めっきり貧乏臭くなった。

ままごとというものは案外恐ろしい遊びである。　ただし、子供にではなく親にとって、という意味でだ。　家庭の中の出来事を、ライブで放送されてしまう恐れがある。
蘭の遊び友達の愛梨ちゃんは、車を運転すると人が変わるママの２面性をリアルに演じきってしまったし、アパート１階の大地くんは、頭をしゃもじでトントンやって、パパの育毛剤使用をバラしてしまった。
我が家の場合、パパがいつも家でゴロゴロしているので、蘭の方が他の子の家へ遊びに行くことが増えたのだが、この際いっそ家から出さないようにしようかと思うほど、恥ずかしいことをいっぱい口走るようになった。　主に料理を作る場面で、そういうことが増えたような気がするのは、わが家が特殊な食事事情を持つ故のひがみ根性だろうか。

「チーン、はいどうぞ」
というフレーズも、この当時急に増えた。
「香川家では出来合いのものが減ったはずなのに、なんだって蘭は『チン』が増えたんだ？」

亭主は不思議そうだったが、私から見たら無理もないことと思えた。
実際にレンジの使用量は増えている。　油を減らすために、炒めものをする前にレンジで下茹でしておくようになったし、できた物をかっちり4等分するので、出来上がった料理を鍋ではなく皿で保存することが増えたからだ。

「チーン、はいパパどうぞ」
「ありがとう、こいつはなんのお料理かな？」
「すっごくおいしいよ、『きのうののこり』だから！」

やっぱり遊びに出すのはやめた方がいいかも知れない。

実際には、我が家では前日の残りを次の日に出すことはない。一日ごとに計量して同じカロリーにしなければならないので、次の日に持ち越せないのだ。　生の状態で、しかも種類別に計らないといけないので、出来上がってしまったものは計量し直すことができない。
あまりにもったいないので、次の日は3人分で計算して、私だけ前の日の残り物ばかり集めて食べたことがあった。　これを蘭が見とがめて、
「ママだけ違うもの食べてる！」
と責めるような言い方をしたので、
「ママのは、きのうの残りなの！」
確かにそう言った覚えがある。
“きのうののこり”というのは、蘭の憧れなのかもしれない。決してうちの貧しさを表現した台詞ではないのだが、どちらにせよ、けち臭いことから始まった「恥ずかしいままごと」であることには間違いないのだった。

我が香川家に、家計上の氷河期が押し寄せて来ていた。
それは恐ろしいことに、病欠中の亭主の有給休暇が品切れになるよりもずっと早くに起こった非常事態なのだった。
有給だからと言って、病欠前と同じ収入があると思ってはいけない。　バブルという言葉はまだなかった時代だが、当時すでに日本は好景気で、企業は活発に動いており、亭主も毎日残業をこなし、休日出勤も出張も豊富にあった。　そういった特別手当が、特に忙しい時期でなくても手取りの3割以上を占めていることが多かったのである。
有給休暇は当然、基本給オンリーになるのだから、これは給料が3割カットになるのと同じことなわけだ。
一方で、支出の方は激増した。　食費がなんと、食事制限以前の2倍近くに跳ね上がったからである。

「ダイエット」イコール「絶食・休食・粗食」ではないことが常識になって来た昨今、
「痩せる食事？　食費が浮いていいわね」
などと言う人は少なくなって来た。　ただ減らすだけではいけないという事実が浸透してきた証拠だ。
そんな現在でも、
「買い物が大変なのよ」
と言うと、それが買い物の全体量及び費用のことだと気づいてくれる人はほとんどいない。　大抵は、いろいろな食材を探し回っていると思うようだ。

冗談ではない。　この忙しいのに何が悲しゅうて、世界を股にかけて珍しい食材を集めるグルメダイエットなんぞという矛盾したことを致さねばならんのだ。　何度も言うが、私のやっているのはダイエット食ではなく、高脂血症を改善するための制限食だ。　ピンとこない人は、糖尿病の病人食とほぼ同じ、と言ったら耳にしたことがあるかもしれない。

その食事の目的は、いかに偏らせないか、そしていかに低カロリーでも満足行く量を確保するかに尽きる。　「ちょっと食べてお腹いっぱいになるダイエットメニュー」とは対極の減量法であることを頭に置いて読んで欲しい。

まず青果食品だけでその量に面食らう。

成人に必要な一日の野菜摂取量は、緑黄色野菜１００ｇと淡色野菜２００ｇを基本とする。　それに果物がりんごなら１個分１８０ｇ程度。　この約５００ｇに廃棄部分、つまり皮や芯がくっついているわけだから、買い物をするときは６００ｇ以上。　単純計算しても、４人家族なら１日２．４？を何が何でも買わねばならないのだ。

その他、牛乳・大豆・肉・魚、全ての必須アイテムを揃えると、１日ひとり４００ｇ位にはなる。　肉の種類や、大豆を豆腐にするか油揚げにするかでかなり重さが違うので、あくまで我が家の平均であるが、買い物に行くたび合計１０００×４を、毎日下げて戻るのだ。

「３キロや４キロの買い物はうちだっていつもしてます」

いやいや、まだ終わりじゃないですよ奥さん、これはあくまで１日で使い切ってしまう食品の量です。　主婦の買い物はまだまだある。

砂糖や味噌、醤油などの調味料、パンやお米、乾麺、そして同じ青果でも炭水化物に計算するのであまり大量に採れない芋・かぼち

ゃの類。　子供がいればジュースやおやつ類も必要になる。　食べ物以外でも、洗剤やトイレットペーパーなど、ひとり分の量が決まっておらず毎日必ず買い換えるわけじゃないけど、定期的に買わなきゃならないものがたくさんある。　これらの買い物を入れると、プラス1キロくらいじゃ利かないでしょう？

我が家の1日分は、平均で6～7？、スーパーの買い物かご1～1．2杯くらいある。　金額にしたら3500円くらいだろうか。

2日分をまとめて買うのは至難の業、お醤油が安いから2本買っておこうなんていう買い方もなかなかできるものではない。　下手にまとめ買いをすると冷蔵庫に入らない。

雨が降ろうが槍が降ろうが、台風の日でも買い物は欠かせない。

どこにどんな気取ったハイヒールで出かけようと、帰りはいつもサンタクロースか大黒様だ。

食材が多くなる理由は、野菜以外にもいくつかある。

前述した「作り置き」や「残り物リサイクル」ができないこともその一つだし、外食や店屋物が取り入れにくく、必ず3食とも家で食べることも、食材が増える原因になる。

また、その他の理由として、「残飯整理メニューが組みにくい」という事もあげられると思う。

どこの家庭でも時々やるだろう、冷蔵庫の残り物をかき集めて一食分にするメニュー。　例えばかき揚げてんぷらとか、炒飯、お焼き、半端食材の卵綴じやどんぶり、またはあんかけのようなもの。

わが家では、そういう物がすべてカロリーオーバーするからできないメニューなのだ。　いや、できないわけじゃないけど、それ1品で1食分がまかなえるほどの量を作るとオーバーするので、それだけのことをやっても、なおかつもう3品くらい作り足さなければならない、つまりどうやっても買い物は毎日要るということなのだ。

給料が振り込まれても、あっという間に財布が空になる。　そういう危機的状況の中で、亭主が寝たきりになるとどういうことになるのか。

安い物を求めて動き回ろうにも時間がない。　節約の工夫をするだけの時間もない。

何しろ作るだけで1日9時間、食事に縛られるのも私なら、子供を公園で遊ばせるのも、買い物をするのも私、電話に出るのも宅急便にハンコを押すのも、近所に回覧板を回すのも、司のおむつを替えるのも子供たちをお風呂に入れるのも私一人。

おまけに、亭主の包帯を変え、亭主の入浴に付き合い、手の届かないものを取ってやり、移動の時には足代わりにならねばならないのだ。　一体何人いるんだ私！

おまけにうちの王子様のマイペースぶりは、いつものことと笑ってられないほど、私のペースをかき乱した。

「おーい、水」

「テレビのリモコン」

「トイレ行く」

せめて「してくれ」とくらい言えんのか、と腹を立てながらも、この種のことは待ったが効かないからしょうがないよなと、調理中の濡れた手を拭いたり洗ったりして駆けつける。

ところが、用事が終わって調理に戻るとまたすぐに呼びつけるのだ。

「蘭が汗かいとるぞ。　着替えさせたほうがいいんじゃないか」

「ティッシュ取って」

「通帳どこだった？」

5分おきに呼ばれるとさすがにむっとした顔になるのだろう。用事を言いつける亭主の方もそれを見て不機嫌になって来る。

「呼ばれたら早く来い」
なんてことをぶつぶつ言い始めると、こちらもついキレ気味になって、
「今すぐやらなきゃいけない事じゃないでしょ。　用事があるならまとめて言ってよ、その度に手を洗って拭いて来るんだから」
なんぞと要らぬ一言が出る。

「いやそうに言うな！　こっちだって自分で出来りゃする。　できないから頼んでるんだ」
「頼まれる方の都合を考えて頼んでくれてもいいでしょ。　なんでひとつずつ待ったナシなのよっ」
「なら、いつがいいか顔に書いといてくれるのか？　暇で困ってるから今頼んでね、とか言って来てくれるのかよっ」
「誰のせいで暇がないと思ってんのよっ」
もとより、亭主も動けないストレスでイライラしている。　こっちは金欠と不眠不休で爆発寸前だ。
あ、しまったと思った時には、亭主は立っちゃいけない事も忘れて立ち上がり、ちゃぶ台ならぬ炬燵台をひっくり返していた。

「ならもう何もするな！　いやいや世話するならせんでいい！」
そこらじゅうの物をガンガン私に向かって投げつけたあげく、足音高く、と言ってもギブスで動かないから片足だけ不自然に踏み鳴らして、亭主は車のキーをつかんで外へ出て行った。
怯えた蘭が声を殺して泣き始め、つられた司が、なんだか事情が分からないくせに一番大声で泣きわめいた。
ああ、またアパート中にこの喧嘩が伝わるんだろうな。
呆然と座り込んだ私の頭の中に浮かんだ思いは、現実的なようで、かなりずれた内容のものだった。　今はもっと別のことを考えないといけないのだと、本当はわかっていたはずなのだが、押しても引いてもそれ以上何の言葉も浮かんでこなかった。

11、男性は勘違いをしている！　妻はあなたの一番の敵です

すすり泣く蘭を抱き寄せ、大泣きする司を抱えたまま、座り込むこと数分。

あまりに唐突な亭主の噴火に呆然としていた時間が終わると、私のハラワタも段々煮え立ってきた。

こんな事はあり得ない。

腹を立てていたのは私なのに、この2か月余り、むかっ腹を立てるのを抑えて家事の激務に身を任せていた私を差し置いて、なんだって何にもしなかった亭主が先にキレたり出来るのか。

大体最初から間違っていたんじゃないか。

病院の指示がまずおかしかった。　私に聖剣を持たせるより先に、まず亭主に間食を止めさせ、空腹に耐えながら体を動かすことを約束させるべきだったんじゃないか。

あれだけ大量に食べていた間食を、本人が自分の意志で止め、体重の管理グラフでもつけて頑張れば、それだけで4キロや5キロは落とせたはずだ。　その管理をサポートするという形で食事の見直しをするのであれば、亭主が自分で高カロリーの物を避ける事にもなるだろうし、そうなると私だってそれほど無理をせずに減量食を作れたはずだ。　亭主のことを信用することさえできれば、

「これはちょっとオーバー気味だから抑えて食べてね」

そう言って、子供の好物を作る事も出来る。

亭主だって、全てを運動に頼って無理をすることもなかったはずだ。

それをしなかったことで、私一人が苦労を背負い、1日2時間半しか寝ないで料理を改善させられ、亭主はそれを台無しにすべくせ

っせと間食をし、その言い訳に過剰な運動をして怪我を負い、動けなくなってますます太りイライラし、にっこり優しく世話をしなかった私にキレて暴行の果てに家出！　本当にあり得ない。

しかもキレるタイミングが尋常なスピードじゃなかった。
いくら普段逆らってなかったとは言え、私が不満を口にしてから1分弱で沸騰するのはあまりに短すぎやしないか。
加熱時間わずか1分！　小型ヤカンか？　レンジ餅か？
男サマの国土には、自分に逆らう妻という異分子を、たったの1分間も住まわせること叶わぬのか。　それは王様の強さと偉大さの表れであると本人は思っているのかも知れないが、違うぞ！
「ただ狭量なだけじゃん！　我慢ができない小物じゃん！」

口に出して言ってしまうことによって、その失望は確信に変わった。
これまで自分の心の表面をコーティングしていた何か大事なものが、パラパラと欠け落ちて無くなって行くのが判った。

ちっこいヤカンはすぐに沸く。
バカバカしい、何が男サマだ。　何が王子だ、ダンナサマだ。
えらそうなふりをしたってもう騙されないぞ。
1分、たった1分だ。　ただそれだけのことが我慢できなくって、ダイエットなんぞ逆立ちしたって出来はすまい。　要するに不満に耐える、その能力がないだけじゃないか。
そんなみみっちい男のために、人生を捧げるのもごめんなら、身を粉にして働くとかぎりぎりまで頑張るとか、奴隷でもあるまいしそんなドMな人生は御免こうむる！

今思うと、その時の私の思考回路は、到底まともとは言えなかった。
何しろ2か月以上不眠不休な上に、押さえつけていた怒りに火が点いた勢いも手伝って、感情的に暴走状態になっている。　私のそれまでの人生で、一番危険で極端な思想を抱いた瞬間であったろう。

３つの選択肢がある、と思った。
後から思い出すと恥ずかしいほどの極論ばかりだったが、その時はそれが数少ない突破口と思われたのだった。
１つ、亭主の帰りを待って、離婚を切り出すこと。
２つめは、このまま子供を連れて家を出て行くこと。
３つめは、本気で殺害用のこんにゃくを買う（ホントにこの時、こんにゃくが選択肢に浮上したのだ）とか、料理に大量の脂を投与するとかして、ばれない工夫の末に亭主をこの世から抹殺することだ。
王子のように魅力的でもなく、王者のように立派でもなく、一般的なパートナーとして優しさも持ち合わせていない、ただのみみっちい陸トドなら、私の人生に必要ない！！

それは魔女の誕生する、ゆがんだ一瞬だった。
私は頭の中で、いかにして亭主を自分の人生の外側に蹴り出すかを真剣に考え始めた。
あの時玄関のチャイムが鳴らされなければ、３つの計画のうちのどれか一つを、私は遂行していただろう。
ドアチャイムはそれを咎めるように、厳かに凛とした響きで、私の濁った思考を引き裂いたのだった。

「急にごめんね。　豊田さんにスコーン貰ったからおすそ分け」

隣りの５０４号室の川崎さんが、ちょっと照れたように視線を泳がせて立っていた。
川崎家はうちより１年半ほど前からこの社宅に住んでいて、家族構成は両親と娘２人の４人家族。　蘭より２つ上の莉奈ちゃんと、小学生の優奈ちゃんは、実に熱心に蘭を誘って遊んでくれるので、自然と親同士も親しくなった。　社宅マダムの付き合いが苦になる私としては、近所で一番よく話をする奥さんということになるだろう。

その川崎さんの顔を見て、ああ、久しぶりだな、と思った。
亭主が倒れて以来、３度の食事に追いまくられて何をするのも駆け足なので、ろくに人と会話した記憶がない。　他人だけでなく、家の中でも必要以上のことをしゃべっていないのだ。　子供たちはまだ宇宙人で、叱ったり指示したりする以外に声を出すと言ったら、本を読んでやったり歌を歌ってやったりするくらいだし、亭主は会話が嫌いな男じゃないが、家の中ではテレビの方が大事で、２、３語聞き取った後はもう上の空。　スーパーの鮮魚コーナーのおっちゃんと、サゴシの調理の仕方なんか話していて、ああ、今週初めて頭を使って話をしてるな、と思う自分に愕然としたりする。

社宅マダムの中には、お隣さんとべったり家族のような付き合いをしている人もいて、
「ガスレンジの敷きホイル一枚余ってない？」とか、
「今日青ジソ買ったんだけど、どうせ余っちゃうから半分こしない？」とか、
「学校のプール当番いっしょにやらない？」とか、
「具合悪いの？　子供預かるから病院行きなさいよ。　あ、うち今日シチューだから持ってって上げる。　買い物なにかある？」などと、財布や冷蔵庫共同か、と思われるような濃厚な行き来がある場合も少なくない。

さすがにそこまで小姑大姑を増やす付き合いはご遠慮したく思うのだが、それにしても私も女の端くれなので、ここまで会話と無縁の生活が続くと、それなりにストレスが溜まっていた。

手作りらしいスコーンの袋を受け取りながら、これはさっきの騒ぎを聞きつけて偵察に来た……もとい、「心配して見に来てくれた」のだな、と察しをつけた。

何故なら時間は１１時半、今日は幼稚園が半日で終わる日なので、お迎えから戻ったママ達が社宅の駐車場で立ち話などしている時間だ。

そこへ、「ちゃぶ台返し」をやらかした亭主が、あの足で、しかもパジャマに半パン（ズボンは足が通らない）というギョッとするような出で立ちで、階段を駆け下りて車でどこかへ行くという、とんでもないワンシーンを展開したわけだから、その後どんな会話がお迎えママたちのテンションをあげまくったのか容易に想像がつく。

で、私と一番親しい川崎さんに白羽の矢が立ち、

「あんたちょっと様子見て来なさいよ」

などとみんなが背中を押しまくって、料理が趣味の豊田さんの奥さんが、言い訳にちょうどいいからとたまたまあった手作りのスコーンを持たせ、親善大使川崎が我が家のチャイムを鳴らした、というわけなのだ。　きっと他のママたちは、１階で都合の良い豊田さんの家にでも集まって、川崎さんの持って来る情報を待っているのだろう。

ああ、同じ社宅に住んでいながら、亭主が元気な連中はこんなに時間が余ってるのだ。

そう思うと、急に全身の力が抜けてしまったように思えた。

後ろを振り返ると、ようやく泣き止んだ蘭が、私のお尻にくっついてボーっとした表情をしている。　その顔越しに、昼食が８割が

た出来上がった状態で中断している台所と、散らかりまくった室内の惨状が見えた。

亭主のひっくり返したこの部屋の片づけをするのは嫌だし、あの台所に戻って亭主の暗殺計画を練るのも、家出や離婚の準備をするのも、当然料理の続きをするのも、もう嫌だった。　何をやっても、何も実を結ばないような気がしてしまうのだ。

それより、どうせあることないこと想像して噂されるのなら、この社宅有閑マダムたちに洗いざらいぶちまけて、陸トド伝説を社宅中にばらまいてやろうか。

その思い付きは新鮮だった。　現状から逃げることと、亭主の横暴に一矢報いること、２つを同時に叶えることができる。

亭主を殺したいわけでも、結婚生活の破たんを望んだわけでもない。

私はただ、復讐がしたかっただけなのだ。　それが大きな規模でも、ほんのささやかな物でも当面はどうでもよかった。

私がただのお料理ロボットではないことや、何の見返りもなくただ亭主の健康さえ守れたら、それで幸せを感じるのだと思い込まれている今の状態が我慢ならないこと、何も実らない努力が死ぬほどつらいことを、亭主は多分永遠に理解しない。　それは一つの罪だと思う。

そのことへの反撃をしたかった。　今すぐ、何でもいいから何かの形に残るように。

「川崎さんお騒がせしてごめんなさい。　もしかして、聞こえちゃった？」

川崎さんの戸惑った顔の上に、待ち構えた笑顔が浮かぶのを私は楽しんだ。

情報をあげる、うちの亭主はもう王子には戻りません。

陸トド、覚悟。

12、他人の家に行くたびに、腹が立って仕方なくなるその理由

豊田家の室内は、うちと同じアパートの部屋とは思えないくらい、ゴージャスかつデコラティヴだった。　ソファカバーにクッション、暖簾からタペストリーまであらゆるものが手作りでセンスもいい。

豊田家のママ（息子は育毛剤の大地くんだ）の趣味は、お菓子作りだけではないらしく、コーヒーやジュースと一緒に出て来るコースターやシュガーケースなどの小物までが、いちいち小まめに可愛らしい。

この部屋と比べると、うちなんて作業場か、よく言って事務室だ。

片付いてないとは言わないが、うちの場合要するに、荷物を効率的に収納しただけで、愛想もムードも飾り気もない。　正確に言えば、そういう要素を持ち込む隙間がないのである。　仮に私に物を飾り立てる趣味があったとしても、我が家でそれが実現できるとは思えない。

物が多すぎるのだ。　これもうちの亭主の性癖の産物である。

自分で買ったものは何一つ捨てないので、引越しのたびに業者の人に「大きいお子さんがいらっしゃるんですか」と聞かれる。　家を出てよそに下宿でもしている息子の荷物が一緒にあると思われるようだ。　それほど亭主の私物は多い。

結婚して最初に新居にやって来た時、亭主の荷物はスポーツバッグ一つだけだった。

「旅行じゃないんだから、自分の荷物を運びこんでよ」

町内に実家がある同志なので、私の荷物も車で地道に運んでおいたのだ。　そうするつもりだろうと思っていたら、当日になっても荷物がまとまっていなかった。

自分の荷物を自分で作れなかったのだ。　母親（私の姑だ）がやってくれると期待して延々と待っていたら、前日になって
「私がするわけないでしょう」と突っぱねられたらしい。　当然のことだ。

「こういうことは当人しかできない事なんだよ」
いくら言っても納得しないので、やむなく一緒に片づけに行ったら、全く手つかずの学習机の中には、小学校の時のお習字の金賞とか「良い歯の賞」バッヂ、幼稚園の時の記念式典のリボンなど、まるで地層のようにそのまんま残っていて、それらの私物が山を成し川を成し、彼の実家の狭いアパートを7割方占領していた。
「これは要るの？」
一つ一つ聞いてみると
「それ何？」
と逆に聞き返される。　じゃあ捨てていいのかと言えば、
「いや、一応取っといて」
と答えるのだ。
「こんな子供っぽい物はもういらんでしょう」
「いや、子供が生まれたら使うかも知れないから」
「この服はもう流行遅れだし、子供も使わないよ」
「ファッションは繰り返すから、孫かひ孫が使うかも知れないから取っといて」
何のことはない、捨てることを考えたくないだけなのがだんだんわかって来たので、私は亭主を置き去りにして新居に戻ってしまった。

そういう亭主の荷物を、引っ越しのたびにいやいやながらに持ち歩いた私の収納アイテムは、１０個のユニット棚と８枚の板だった。
転勤して新しい社宅に入るたび、収納庫に入りきらない荷物が山のように余る。　それらを片づけるため、家の中で空いた壁面とい

う壁面に、天井まで届く棚を組むのである。
ユニット棚とユニット棚の間に板を渡し、ボルトで固定しながら積み木のように組んで行く。　その棚に荷物をいっぱいに入れ、その上から板に画びょうでポスターやカレンダーを貼って、それが我が家のタペストリーとなるのだ。

だから、何度引っ越しをしてどんな部屋に住もうと、家の中で写した写真は全部同じ家の中に見える。
壁のない家なので、表彰状を貰っても飾るところはない。　無理やりテーブルの様な物を置いても、すぐに亭主がその上を物でいっぱいにしてしまうので、花束を貰っても花瓶を置く場所もないのだった。

かわいい掛け時計やタペストリーに囲まれた豊田家の室内を見回しながら、私はますます腹立たしさが極まって、集まった社宅マダムたちに亭主への不満をぶちまけた。
さすがに“出社停止”の噂は社宅全戸に行き渡っており、みんな詳しい話を聞きたがっていたらしい。
現役で料理に携わる主婦たちは、亭主とは段違いに素早く、制限食の困難を理解してくれた。

「それでそれで？　レシピや重量は全部書き出しといて始めるの？」
「ってことは出来上がった料理はかっちり等分しなきゃダメよね」
「中央にドーンと盛り付ける料理はないのね、食器を無駄にいっぱい使うわ。　洗うの大変ね」
「チビちゃんたちはどうするの？　等分にしたって大人と同じ量は食べられないでしょう」
「カレーのルーから自分で作ってるの？　そうか、塩分糖分、全

部別に計ってるんだもんね」
「〇〇の素ってのは全部だめなのよね。　うち、マーボ豆腐の素がないとつらいなあ」

ところが彼女らにも理解できないものがあった。　社宅マダムたちは、口を揃えてこう言ったのだ。
「香川さんは凄いわねえ。　私だったら絶対そんな面倒なことできないわ。
うちも亭主が高脂血症気をつけろって検診で言われてるけど無視してるもん。
制限食作れって言われたって、無理だって投げちゃうわよ」
いや、断れるものならうちだってそうしていた。　体重を減らさないと出社できないと言われても、平気な顔で高カロリー食品を与えられるものではなかっただけのことだ。

「そんなことしなくても、自分が困るんだから、切羽詰れば旦那が絶食でもなんでもするわよ」
「そうよ。　小さい子抱えて出来る事じゃないんだから、私なら絶対断る」
「私も。　実家に帰っちゃうわ」
「嫌なら自分で作れって言うわよねえ」
「香川さん優しいから」
「ラブラブなのねえ」

そうだろうか。　この中の全員が、実際に私と同じ立場になった時、本当に食餌療法を拒否するとは私には思えなかった。　結局ぶうぶう言いながらも、やらなきゃならない事はやってしまうのが女房ってもんじゃないだろうか。
ただしそれは、単純に亭主を愛しているからとか、心配でたまらないからだと思ってもらっては困る。　それだったら愛情を感じな

い日は即、料理なんか作らないぞという事になるではないか。　朝、出がけに言われた一言が気に入らないから今日のご飯は早死にするようにトンカツよ。

そうではないだろう。　大抵の奥様が、亭主に少々気に入らないことをされただけなら、いらいらしながらも食事くらい作るだろう。
要は愛情ではないのだ。
結局、ラブラブだろうがシオシオだろうが関係ない。　自分が家庭内で調理担当者であり、家族の需要に合わせた働きをするのが仕事であるから、というドライな理由が一番大きいように思う。

話し込んでいる間に、車の音がした。
威勢よく出て行った割には早く、亭主が戻って来たのだ。
私達が窓辺に殺到してこっそり外を覗くと、亭主はギョッとするような荒っぽさで駐車場に車を入れ、せかせかと階段を登って行った。　短パンに長袖パジャマ、足にはギプスというおかしな恰好で、逆に表情は不気味なくらい真面目だったから、みんなが笑いをかみ殺していた。　亭主もまさかこんな至近距離で覗かれているとは夢にも思わないだろう。

もぬけの殻になった我が家を見て、亭主は何を思うだろう。　考えると愉快だった。
その日はそのまま豊田家に居座り、ラーメンとみんなの持ち寄りのおかずを頂いておやつの時間まで話し込んでいた。　蘭と司は、ママと一緒に集まった遊び仲間の子供たちと、楽しそうに遊んでいた。

「香川さん、香川さん」

揺り起こされて目を開けると、部屋の中には夕闇が立ち込めていた。　室内に料理をする匂いが漂っている。
いつの間にか豊田家のソファの上で眠ってしまったらしい。　慌てて見回すと、他の奥さんたちの姿はなかった。　豊田さんは自分の家の夕食を作り終えるまで、私を寝かせておいてくれたのだ。

「うわ、どうしよう。　こんな時間までごめんなさい」
「いいのよ。　ものすごく疲れてるみたいに見えたから起こさなかったんだけど、かえってまずかったかしら」
「いいえ、ありがとう。　ごめんなさいね迷惑かけて。　帰るわ」
「そう。　ご主人、あれから出て来てないから家にいらっしゃるわよ。　大丈夫？」
「うーん。　どうかしらね」

仮眠を取ったためか頭がすっきりして、私の腹は据わっていた。
取りあえず家に戻ろう。　こんな着の身着のままで、どこへ行けるわけでもないのだから。
帰って来た私たちを見て、亭主がどんな態度を取るかで別れる云々の決断をしてもいいはずだ。

蘭の手を引き、これまた居眠りをしていた司を抱いて、わが家の玄関の戸を開けた。
ずどごん、ずどごん、ずどごん、ずどごん！
とんでもない音を立てて、亭主は3秒で玄関に飛び出して来た。
ギプス、意味なし。
安静のために着けているのに、こんなに乱暴に歩いたら、かえって足に悪いだろう。　それより何より、それだけ歩けるものなら、最初から爪切りまで人に持って来させるなと言いたい。

「どこ行ってたんだ！　さ、沢井か」

沢井というのは私の実家だ。
「違う」
「どこだ」
「どこも行ってない」
口をきく気にならないので、いい加減に返事をしながら室内を見回すと、ひっくり返っていたちゃぶ台が元に戻っている。　どうやら亭主は、「片づけて掃除をする」などという前代未聞の行為に手を染めたようだ。

キッチンに入ってみると、作りかけの料理が片づけられて冷蔵庫に入っていた。
「いちおう、昼飯は作ってあった奴を食った」
亭主がぶっきらぼうに言い放った。
「そりゃあ……」
さぞ大変だったでしょう、と私はあきれた。
料理は未完成だったのだ。　煮物は生煮えだったはずだし、和え物にはまだ味をつけていなかった。
最後に作っていた炒めものに至っては、先にレンジで火を通しただけで、味付けどころかフライパンに投下してもいない。　ただの「蒸した野菜」だったのだ。

「一平」
パパ、でもあなた、でもないこの呼び方は結婚前の物だ。
私は結婚なんてしなきゃよかったと思うたびに、この呼び方で亭主を呼ぶ。　呼ばれた方は、ラブラブ時代の呼び方と喜んでいるみたいだが。
ほっとしたように振り向く「もと王子様」の顔面に、私は最後通告を突きつける。
「私はもう、制限食を作りません」

１３、別れようと決めた時、天にも昇る心地になるのは何故だろう

「なにはともあれお金がありません。　今日はもう遅いから、夕食はお惣菜でも買って来るけど、そのお金で生活費はゼロになるわ。　あとは住宅か、子供の学費か、車検か、どれかのための積立を切り崩すことになる。　その先は私が仕事に出ることになるだろうし、時間も無くなるから。

もしちゃんとしたものを食べようと思うのなら、家にいるあなたが作って」

女房にそう言われた時、男サマの返事はどういう物だったかというと、

「こういう時のための貯金もしておかなかったのか」

実に彼らしい言いぐさだった。

私のせいか？　第一、こういう時とはどういう時だ？　亭主がダイエットしたくないもんだから会社から跳ねられてる時か？　そんな想定で貯金している女房がどこにいるか。

結婚して何十年も経つわけじゃないのだ。　当時何か急病の時を想定して蓄えていた金額と言ったら、せいぜい３０万くらいだったろう。

その３０万を、ここ数ケ月の華やか且つ執拗な検査と通院と薬代攻撃ですでに半分近く失い、残りの半分を、険しくないが容赦もない食費の波状攻撃に持って行かれてしまっている。

「そういうことを、何でもっと早く言わないんだよ」

「言ったわよ、食費がかかりすぎて危ないって。　私としたら早く会社に出て欲しい一心だったんだけどね。　そしたらあなた、何をした？

『一日３００円でできるダイエットメニュー』って本を買って来て私にくれたのよ！」

これは正直屈辱だった。　つまり亭主は、私の工夫が足りなくて経費を使いすぎていると判断したのだ。　本人は手助けをしているつもりでいたらしいが、そんな余計なことを応援するより本人が頑張ればいいだけのことなので、こちらとしてはさっぱり有難くなかった。

おまけにそのダイエットの本がまるで使い物にならなかった。この本が役に立ったことと言えば、わが家の食費がかかるべくしてかかっているのだと確信できたことだけだ。

ページをめくれば確かに、カロリーも費用も控えめな料理が並んでいる。　ただし、野菜の量は我が家で課せられている量の半分以下だ。　仮に自分で量を足して作るとしたら、調味料も倍加するのでカロリーは跳ね上がる。　自分で食べる量を抑えて我慢する人のダイエットならこれでいいかもしれないが、こんな小鳥のエサの様な量の食事を出したら、亭主はお菓子の家にでも住んでるのかというほど間食をすることだろう。

何よりこういう物は、１回のゲリラメニューには良くても、１か月のトータルで考えると相当に難しい。　毎日必ず、もやしと大根とワカメとキノコと豆腐を手を変え品を変え出されても、作る方も食べる方も飽きてしまう。　おまけに昼ご飯なのに弁当に入れられないとか、食材が珍しすぎるとかいった理由で使えないメニューも多数あるのは、他の料理本と大差ないのだ。

「とにかく働く話はちょっと待て。　当座の金は俺が出すから」

ついに亭主はマイペースを返上して媚を売り始めた。

「そう、わかったわ。　とにかくお惣菜を買いに行ってきます」

「もう暗いから、車を出すよ」
「ひとりで行ける。　子供を見てくれてたほうが助かるわよ」
亭主は黙ってうなずいた。　こいつだって長い付き合いで、私がこうなったら絶対に譲らないことをよくわかっているのだった。

あれは私たちが付き合い始めて2年間くらいの時だ。
いくら小学校からの同級生と言っても、そんな子供のころから恋人同士だったわけじゃなく、むしろ他の同級生より会話の数は少ないくらいの幼馴染だった。　付き合い始めたのは私が短大を卒業して、就職してから1年も過ぎてからのことだった。

当時の亭主は今以上にこらえ性がなく、口論になるとつい手を出すことも多かった。
もちろん猛烈に手加減がしてあって、決してひどく痛かったりけがをしたりするわけじゃないのだが、フルヴォリュームで怒鳴りながらパコンとやられると、とにかく怖くてすくんでしまう。　高じると刃物でも出すんじゃないかと思うほどの迫力がある。
結局何一つ納得していないのに、私の中の、反論する気力だけが萎えることで、事態は収拾するのだった。

私達に「喧嘩」という状態は成立しなかった。　不平、脅し、鎮静の3段階があるだけだ。
しかしこの「脅し」の暴力を、本人は暴力とまでは考えていないようだった。

ある晩、ふたりで飲みに行った帰り、些細なことから路上で言い争いになった。
人目の多い繁華街なのに、亭主は私の頬を軽くはたき、また運悪

く私の顔のそばに看板があったため、よろけた私がそこに頭をぶつける音が、お寺の鐘のように大きく大きく響いた。
通行人からは驚愕と非難をこめた視線の矢が亭主に集中。　その中から一人の中年女性が私を支えてくれ、耳元に素早く囁いた。
「殴る男はダメよ。　早く別れなさい」

その時私の頭の中で、なにかが切り替わるような音がした。
あーそーだったのかあ、という簡単な感想が私を安堵させた。
喧嘩というもの、とりわけ負け戦というものは人を卑屈にする。
それまで腹を立てながらも、どこかで「言い方が悪かったのかな」「我儘だったかな」とふらついていた心の中が、綺麗さっぱりツルツルになって冷たくまっすぐに伸びたのだ。

なあんだそうか、この男はダメだったんだ。
私の人生をかき回すだけの価値はない男だっただけなんだ、だから合わなくて当然なんだ。
今まで無駄な時間を過ごしてしまったんだ。人生は有限なのに、もったいないことをしたなあ。

「よし、もうやめよう」
わたしは晴れ晴れと亭主に言った。
「ついて行けそうにないからもうやめるわ。
勝手で悪いけど、そういうことでもう会うのやめよう。　恋人とかもやめようね。
ということではい終了、解散。　じゃーね」

2年間恋愛した相手と別れる時の台詞とは思えないことを口にしながら、怒りも意地も悲しみもなかった。　にこにこしてさえいたかもしれない。
それまで王子様に傅く侍女か奴隷かだったのを、無理やり恋人と

思い込もうとしていたのだ、今日からは私は自由だ、そんな思いでわくわくするのだ。
あとで正気に戻ったら泣くかもしれないけど、その場では本気で嬉しい瞬間がある。　この時の解放感は男にはわからないだろう。
後日亭主はその時の私の様子を、「頭打って人格交代したのかと思った」と言っていた。

ボーダーラインを超えると、私は突然投げ捨てる。

そのあと、どんな経緯で私たちが復縁したのかという話は、長くなるので割愛するが、それ以来亭主はどんなに腹が立っても、直接私を殴ることはしなくなった。
制限食をやめる、と宣言した時の私の表情を見て、あの時の悪夢がよみがえったことを悟った亭主は、それ以上何も反論せず、子供たちと家に残って私を送り出した。

会社帰りの社会人でぎゅう詰めのバスや、家路を急ぐ学生たちとすれ違いながら、足取りはとても軽かった。　もうあの七面倒くさい料理を作らなくても済むのだ、もう私は勇者でもない、キッチンの神様でもない、王様の秘薬を作る魔女でもない。　あと１０分で文無しになるのがちょっと悲しいだけの普通の主婦に戻れたのだ。

お惣菜も久しぶりだ。　蘭にこの前、「お化けの天ぷら」という絵本を読んでやったら、
「てんぷらっておいしいの」と無邪気に質問した。
もう味を忘れてるんだ、買って帰ってあげよう。
食餌療法をやってる時には「何を買おうかな」などと考えることはなかった。
買えたもので何を作るかの方が重大だったからだ。　それだけで、

買い物する気力が全然違う。

「きょんきょん！！」

突然、道路の対岸から大声で呼ばれた。

こんなオバサンをそんなアッパラパなあだ名で呼ぶ人間なんて世界に一人しかいない。　見ると、接骨医の舟木は血相を変えてこっちへ駆け寄ってくるところだった。　いつも飄々としているこの男に似合わぬ慌てぶりに、私は一瞬、車に轢かれかけているのかと自分の周囲を確認した。

「どこ行ってたんだよ！！　一平がメッチャ心配してたんだぞ」

「心配？」

自分が心配かけたのだろうに、と首を傾げた。

「あいつ、自分が怒鳴りつけたからきょんきょん家出したのかと思ったんだよ。

家の周り探して、お互いの実家も連絡したけどいなくて、きょんきょんの友達に電話して探したけどいなくて、それでうちへ連絡して来た」

「舟木んちへ行くわけないじゃん」

舟木ももとクラスメートではあるけれど、女友達と違って家に上がり込むような付き合いは、学生当時からなかった。　増してやお互いが結婚した今、奥様を差し置いて家に上がり込むような展開はあり得ない。

「見当違いな男だわねえ。　何考えてんだろ」

「一平も言ってたよ。　あいつ何考えてんのかわからんって。言ってくれないし、ってさ」

「言ってもわからんくせになー」

「あてつけに自殺とか急に思い立ったらどうしよう、って怯えて

たぞ」
「自殺ですか」
思いもよらなかった。　なにしろこっちは「こんにゃく殺人」をもくろんでいたくらいだから、亭主も取りあえず私がそっち方面に豹変しない事くらいはわかっているものと思っていたのだが甘かったらしい。

「女の子で一平の知り合いって言うと、もっちゃんと楢屋さんと、海ちゃんくらいだろ。　そいつらに電話して、女の子の知り合いに連絡してもらうんだとか言ってたけど、それでだめなら捜索願いでも出すって」
「ま、待て待て、ちょっと待て。
あのトド一体何人に電話して、このくだらない夫婦げんかの顛末をばらしたの？
今聞いただけで相当な人数だと思ったけど」
舟木はそこで初めて、いつものようににっと笑った。
「たぶん町内に残ってる奴はもれなく知ってるだろうな。　一躍有名人だ。
顔がつながったんだから、今後の同窓会の幹事は、香川夫婦でやってもらおうかな」

やられた。　私が社宅内に亭主の悪口を振りまいて悦に入っている間に、敵は町内規模で喧嘩の詳細を振りまきやがったのだ。
「ま、似た者夫婦って言わせてもらうよ。
似たものだからくっついたのか、くっついた後で似たんだかは追求しないけど。
あと３０年もすりゃそんなことどっちでも同じになるんだろうからさ」
舟木はにやにや笑いを崩さず言った。
珍しく、下ネタで締めずに終わらせるつもりのようだった。

１４、突然襲ってくる隣家の不幸は、夫婦関係を変える力を持っているか

「なんておいしいんだろう」

肉の少ない８０円のコロッケを食べて感動した。

ただカットしただけの干からびた野菜が入っているパック物のサラダを、味も付けずに口に放り込んで、野菜って美味しかったんだなあとしみじみ思う。

そう、毎日あれほど大量の食材を調理しながら、私は「飢えて」いたのだった。

褒められる機会や達成感が少ない。

労働時間が長い。

ストレス発散の場が少ない。

主婦に特有の不便不幸は山ほどあるが、大きなマイナスの一つが、毎日の食事に対する楽しみが見いだせない事だと思う。

キャンプや調理実習でたまに作るだけなら、自分が作った料理もおいしく感じるのだろうが、毎日毎食だとほとんどおいしさを感じなくなる。　どんな味かなと期待して口に入れる過程のない料理に、メニューだの味付けだのと言ったこと以前に、脳のどこかが麻痺あるいは辟易してしまうのだろうか。

それでも、例えば自分の好きな食材やメニューを取り入れたり、面白い組み合わせや味付けを試したりして作るなら、料理も楽しんで作ることが出来る。　また、家族で向かい合って一つの鉢から競うように取り分けたり、食卓に並んだ大皿から何をつまもうかと迷ったりしているうちに、食欲が沸いてくることもある。

食餌療法をしていると、食材も組み合わせも苦し紛れ、好みの物を作ろうとしたらカロリーオーバーする。　給食のようにひとり分に分けられたお皿からは、迷って取る過程の楽しみが奪い取られている。　これでおいしく食べろと言う方が無理なのだ。

ここ3か月のストレスでいっぱいいっぱいになっていた私の胃袋にとっては、我が家の食事はただの「飼料」だった。　まずいわけでも腐っているわけでもないのに、口に入れた途端吐き気がしてトイレに駆け込んだこともある。

肝心の亭主がほとんど痩せていないのに、私の体重は6キロ近く落ちていた。

そんな私にとって、他人が揚げてくれたコロッケはまさに至福の味わいだったのだ。

子供たちも、スーパーの惣菜を大喜びで食べた。

蘭は天ぷらを見て大興奮、衣を外して、中にお化けが入ってないかどうか確かめながら口に入れていた。

ところが亭主は、揚げ物に手を出すのをためらって、青虫のようにサラダばかりを頬張っていた。

毎日あれほどのポテトチップを平らげ、チョコレートを丸食いしている男が、コロッケにも天ぷらにも箸を伸ばさない。

私の怒りのパワーに恐れ入っているのか。　これ以上がっついたら離婚の危機だと判っているのか。

いやいやそればかりではない。

よく考えたらある意味、今夜の食卓は「毒薬」であると言えなくもないのだ。

たとえば、亭主が重症のピーナッツアレルギーだったとする。

ひとかけでも食べたら命にかかわると知っていて、女房が故意にピーナッツを混入させた食事を作ったら、結果によっては殺人罪が適用されるだろう。
では、油を取り続けると必ず血管が詰まると言われたわが家の亭主に、毎日コロッケを食わせるのは殺人か？
答えは多分ノーだ。　目に見えない形で入れるならともかく、出されたコロッケを食べるか食べないかは亭主の自由だからだ。
つまり、私が亭主を殺すために毎日殺人用のメニューを組んでいたとしても、歴然と高脂肪とわかれば食べた亭主の責任だという事なのだ！！

亭主はその考えに思い至って初めて、わが身を守ることを考え始めたのである。
澄ましてコロッケを食卓に並べた私が魔女であることを、ようやっと認識したらしかった。

私にとって天国で亭主にとってそうではなかった食事の時間が終わると、表面上はいつもと同じ夜が訪れた。
私は蘭と司を風呂に入れ、亭主の入浴を手伝い、ギブスの包帯を取り換えていつも通りに就寝した。
ただし、私たち夫婦の間に笑顔はなかった。
会話は最低限の物だけで、さりとて怒っている様子を見せたり、さっきはどこに行ってたとか、なんで実家に電話なんかするのかとか、本当なら真っ先に口にしなければならない話題に触れることもせず、探るような視線で相手の後ろ姿を追い回す以外のことをふたりして避けていたのだ。
触ると面倒が再発する。　単にそれだけの理由だった。

救急車のサイレンが響き渡ったのは、明け方近い時間だった。
音はびっくりするほど近くで鳴り響き、私と亭主はばね仕掛けの人形のように飛び上がって起きた。
数人のあわただしい足音が、かすかな金属音と共に階段を上がって来て、すぐ下の階で止まった。
ドアの開閉する音と、人の話し声。

「落合さんちに入った！」

私たちは急いで玄関を開け、階下の様子を伺った。
４０３号室の鉄製の玄関ドアは既に閉まっており、中で人の気配がするような気がするだけで、外からはほとんど何もわからなかった。
「誰が乗るのかわかるかしら」
「お前、様子聞きに行って来いよ」
「今？　迷惑だわよ、私パジャマだし」
「俺よかマシだろ」
亭主を見るとズボンが履けないのでパンツ一丁だ。
その時になってから、亭主とうっかり普段通りに会話をしてしまったことに気付いたのだが、もう今さらどうしようもなかった。

落合家は、そのあと２０分近く沈黙していた。
天井と床を共有している同志であっても、そこでどんな事態が起こっているのかは伝わってこない。そろそろ聞き耳を立てるのにも飽きて来て、私は朝食を作り、亭主はテレビのスイッチを入れた、その時だった。

落合家の玄関が開き、ストレッチャーを転がす音が響いた。　数人の足音がそれに絡む。

大急ぎで玄関を開けて見ると、階段を降りて行くストレッチャーには誰も乗っていなかった。
空のストレッチャーと救急隊員だけを乗せて、救急車はサイレンを鳴らすこともなく戻って行ってしまったのだ。　わずかに明るくなりかけた朝の空気の中で、社宅の人たちが何人もベランダに顔を出してそれを見ているのが判った。

呆然と見送る私たちの耳に、地を這うように低く大きな唸りの音が届いた。　落合家の室内からだ。
うをををををん、と腹に響くその音が、人の声であることに気付くのにかなりの時間がかかった。　その声が泣き声で、しかも女性の物だと判ったのはさらに後のことだ。　それほど人間離れした、何もかも忘れ果てて悲しむ人の出す声だった。
私は今でも、テレビのニュースで殺人や事故で亡くなった人の家の玄関が映るたび、この時の奥さんの慟哭の声を思い出す。

その朝亡くなったのは、落合さんのご主人だった。
死因は心筋梗塞で、発症した時刻には、奥さんは「シルフィーベーカリー」でパートの仕事中だった。　発見したのは3年生の長男、雅人くん。
弟に揺り起こされた長女の5年生、瑞樹ちゃんが、パジャマのままで奥さんの仕事場まで知らせに走り、それから救急車が呼ばれたのだが、ご主人は既に亡くなった後だったという。

私の脳裏に、あの朝、青い顔をして破れたごみ袋を持ったまま立ち尽くしていた、落合さんのご主人の姿が再生された。　顔色が悪いと思ったのは、慌てていたからではなかったのかも知れない。
あっという間の出来事で、誰もが唖然としていたが、当然、一番ショックを受けていたのは奥さんだった。

彼女は一種のパニックを起こして錯乱し、数時間何もできなくなってしまったので、子供の関係で特別親しくしていた社宅の奥さんたちが数人で落合家に乗り込んで、いろいろな手続きを手伝ったらしい。

その日の午前１０時、社宅内の緊急連絡簿でお知らせが回って来た。

落合さんのご主人が亡くなって、今夜お通夜、明日の午前に葬儀を行うこと。

互助会などに入っていなかったため、葬儀は急遽、町内の集会所を押さえたが、通夜をやる場所が取れず自宅の４０３でやるから、騒音等に注意して欲しいこと。

狭い社宅の家で、ご遺体を安置して通夜の準備をすると、押入れや箪笥が使えなくなり家の中が機能しなくなるし、それでなくても奥さんが尋常な状態ではなく、県外に住んでいる親兄弟親戚も、通夜ぎりぎりにならなければ到着しないので、ご飯や子供たちの寝泊りを助けてやって欲しい、ということ。

社宅マダム達の団結力は素晴らしかった。

長老役の紺野ばばあが音頭を取り、同じ棟の主婦全員に、炊飯器いっぱいのご飯を炊いて集まらせた。

４０１号室の紺野家の台所でみんながありったけ握り飯を握り、スーパーで急遽用意したプラスチックの弁当容器に詰めて行った。

隣りの４０２はおかずを詰める作業場になった。　遠くから来る親族の為に、各家庭で煮物や揚げ物を一皿ずつ作って持ち寄り、その場で酢の物なども作りながら４０１から運ばれて来るおにぎり入りパックに詰める。　作業するキッチンが狭いので、それぞれが自

宅で準備しては入れ替わり持ち込む循環方式だ。
３時間ほどで、お通夜に出すための３０食ほどの弁当とつまみ、それと落合家の昼食や明日の朝ごはんまでが整えられた。

その間、私は家の食事を作ることも食べることもできず、昼食の時間に家に戻ってみると、亭主と子供たちは文句も言わずに台所のどこかから発掘したらしいうどんを茹でて食べていた。　汁の作り方が判らなかったらしく、ポン酢に何かを混ぜたとか言って怪しい液体をかけていたが、司まで問題なく平らげていたので、そこまでとんでもない味ではなかったのだろう。

「俺、夕食もこれやるのは無理なんだけど」
ものすごく遠慮しながら亭主が言った。　まあ、この足で立派に留守番をして子守りもしてくれたわけだから、こちらとしてもそれ以上要求するつもりはない。

勝手のわからないキッチンで、どう仕上がるか予測がつかない料理を作るのは怖かったでしょう。
私はいつもそうやって調理をしているのよ。　だって普通の家では、味見して足りなかったら足せばいいけど、うちは食材も調味料も上限が決まってるんですもの。　食べづらいほど薄かったら食べられない料理になるだけなのよ。　失敗したらどうしようって、胃が痛くってしょうがないわよ。

ここのところ私がして来た苦労に比べたらまだまだもとが取り足りないが、亭主が多少なりとも料理で苦労をしたらしいので、私の溜飲も少しは下がったのだった。

「夕食までには何とか間に合わせるけど、もっと別のことを心配した方がいいわよ。

あなたは今夜7時には喪服を着なきゃいけないのに、どこの巨人に借りたらその足が入るのかしら、とかね」

だから、さっさと痩せてりゃ問題なかったのにねえ。

意地悪く笑って、亭主が頭を抱えるのを密かに楽しむ。

かくして昨日からたった1日の間に、すっかり性格が悪くなったことを自覚した私だった。

15、亭主に言われて一番うれしかった言葉と、貰って一番うれしかったもの

この晩の落合家の通夜の様子は、思い出すのもつらい。
葬という字の付く祭典である以上、悲しいのは当然なのだが、ご主人亡き後残された母子の憔悴した様子は、見る者の胸を痛ませた。

狭い室内は、ご遺体と祭壇だけでほとんど足の踏み場もない。
玄関で弔問客を迎えた奥さんは、姉らしい人に始終支えられてやっと立っているような状態で、その顔は泣き疲れたせいか、かえっていつもより無表情に見えた。
姉の瑞樹ちゃんと弟の雅人君は、母親の横で下を向いたまま唇を結んでマネキンのように固くなっており、室内に入って座った後も、棺や祭壇の方を決して見ようとしなかった。
読経が始まっても、奥さんはやはり無表情のままだったが、時折何か思い出すらしく、ひどく唐突にハンカチに顔を伏せ、オワッと場違いに大きな嗚咽の声を漏らした。　その声を聞くたびに、弔問客たちはびくっとして顔を上げ、理由もなく申し訳ない気持ちになって慌ててうつむく。

知人の葬儀に出たのはそれが初めてではなかったが、こんなに緊張を強いられた式は初めてだった。
何の覚悟もなく突然に家族を失うことが、どれほど強烈に人を打ちのめすか、まざまざと見せつけられた思いがした。

亭主は喪服の装着に困ったあげく、主治医に相談してギプスを外して貰いに行った。
そうしてまだ腫れの残る足を、喪服のズボンに無理やり突っ込み、ぱっつんぱっつんになって通夜に列席したのだった。　絶対に正座

するなと言われたらしく、目立たぬように玄関の外から両手を合わせて読経を聞いていた。
もっとも、室内に入りきれない人は他にも居て、みんな焼香だけ済ませた後、同じように階段の方まで後退して合掌していたので、亭主が正座しない事はほとんど目立ってはいなかった。

私も、連れて来た司がじっとしていないので、やむなく読経の間、一度家に戻ったりしていた。　そんなわけで我が家で一番優秀な弔問者だったのは、2歳の娘、蘭だったことになる。
このおっとり型の長女は、私が司を連れて家に戻る時、和室で大人たちの中に埋没して座ったまま取り残されてしまったのだが、「動いてはダメ」と言った私の言葉を忠実に守ってじっと座っていた。
生まれて初めての異様な風景に気を飲まれて、取りあえず周りに合わせようとしたのかも知れない。

式が終了した後、亭主と一緒に喪主に挨拶に行くと、落合さんの奥さんは最初の頃よりもだいぶ落ち着いてきたようで、お世話になりましたと頭を下げた。
「どうも、申し訳ない。　近くに居ながら、何も助けてあげられませんで……」
亭主が言うと、奥さんは激しく首を振った。
「助けなきゃいけなかったのは私です。　近くに居なきゃいけなかったのも私……。
私ダメな奥さんで、こないだの健診で気をつけろって言われてたのに、何もしてないんです。
主人はいっつも帰りが遅くて、家で夕飯ろくに食べないんで……」
「仕事が忙しかったんですね。　新プロジェクトのメンバーだったの知ってますよ」
「でも私、香川さんとこみたいにいい奥さんしてないから。

どうせ夕飯要らないなら早く寝て、早朝パートに行こうって。
で、結局朝ごはんもお弁当も作れなくなっちゃって。　自分と子供のことばっかり……」

落合さんはこらえきれなくなって、とうとう声を上げて泣きじゃくった。
「やらなきゃよかった。　やらなきゃよかったあんなパート！！
そしたら発作の時、きっと一緒の部屋で寝てたし、きっともっと早く、救急車もっ……」
「奥さん、もう……」
泣きながら震えが止まらなくなった奥さんを、お姉さんがまた支えに来た。
「もうやめなさい、あんたのせいじゃないってば」
小声でなだめながら、私たちに会釈ひとつして、お姉さんは彼女を台所へ連れて行って水を飲ませていた。

私は何も言うことが出来なかった。
落合さんの悲しみが、連れ合いを失ったことだけではなかったという事が、私にとってはとても重い事実だった。　彼女は喪失感と同時に、襲って来る後悔に苦しめられていたのだ。
亭主の側にいなかった罪。　健康管理をしなかった罪。

「香川さんは優しいから」
他の人にも言われたが、私は優しい妻だから食餌療法をやったわけじゃない。　そうしないと出社できないと言われなかったら、きっとしなかった。
その上、それさえも昨日付けで仕事放棄したのだ。

「身につまされるな。　他人事じゃない」
亭主が我が家の玄関に入った途端、押し殺した声で言った。
それじゃ今まで他人事だったのかいとは、その場では言わなかった。

その時私と亭主は、間違いなく心に同じ思いを感じていた。　不安というマイナスの思いではあったが、同じ不安に心を浸しているのは久しぶりのことだと思った。
出会ったころは同じ小学生だった。
その後、中学・高校と進んでも、互いに学生という同じ立場だったから、会って話をしてもさほどの距離感はなかった。
就職した時期は違ったが、親が口うるさいとか上司がめんどくさいとか、多少の差はあっても同じテーブルの項目を上げることが出来るので不自由は感じなかった。
ところが結婚して「夫」と「妻」というそれぞれの立場に分裂した途端、全く噛みあわないことが増えて行った。　亭主は「一家の主」として君臨しようとする余り、ことあるごとに自分が軽んじられているのではと疑い、私は私で「いい妻」として一歩下がろうと努力しながらも、どこか割り切れずに足掻いていたのだ。
家を守っているのは自分なのに、それを掲げて口上を述べることが何故許されないのか。
その不満がいつも胸の中でくすぶって、ともすれば憎しみに転じる。　私はそんな自分の醜さから逃げたかった。
だって誰でも、王子様と結ばれた瞬間は王女様だったはずなのだから。

今、私たちの見ている未来のビジョンは、おそらく二人同じものだ。
亭主の写真が黒縁の額の中で笑い、私がその前で泣き崩れると言う、縁起でもないビジョン。

そんなことで気が合ったって嬉しくもなんともないのだが、同じ空気を感じることで、つまらない文句を言う気は失せていたのだった。

「おい。　ちょっといいか」

子供を寝かしつけて立ち上がった私を、隣りの部屋から亭主が呼んだ。

私を、食卓を兼ねた炬燵台に座らせ、亭主は対面に腰を下ろして、一冊の通帳を卓上に据えた。

「なに、これ」

「なにこれじゃあるか。　金が要るんだろう。　これ使え」

開けて見てびっくり、３００万円以上入っている。

「どうしたの、このお金」

「結婚前から貯めてた金だ。　結婚式と旅行と新居の費用である程度使ったが、ジミ婚だったから１５０万残った。　残りの１５０万は結婚後に貯めた」

「どうやってそんなに貯められたのよ？」

「小遣いを４万円ずつもらってただろう。　ボーナスごとにご苦労様と言って１０万ずつくれてもいた。

でも俺は酒を飲まないし、昼飯はお前が毎日弁当を作ってくれたし、髪も器用に切ってくれたから床屋代は要らなかったし、通勤は自転車だったのに通勤費は全額俺にくれてたから、少々の出費はそこから出せたんだ。

毎月３万とボーナス時に１０万が２回、これで一年に５０万貯まった」

驚いて返事が出来なかった。　決してケチケチするタイプではないが、無駄な出費はこだわって避ける男だとは分かっていた。　し

かし、こんなところにその成果が出ていたとは。
「お前が頑張って身の回りのことをやってくれたから、俺は何にも使わずに済んだ。　だからこれはお前が使っていい金だ。　給料だと思って使え。　それが無くなるまでには復帰して稼いでやる」

給料、という言葉を聞いた途端、通帳の文字が見えなくなった。
私はあわてて涙がこぼれないように必死で瞬きを繰り返した。
その数字を見失う訳にはいかなかった。　それは私の努力が、亭主によって数字として変換されたものだったのだから。

「大変だとは思うけど、食事制限、続けてくれるか。　なるべく早く体重落とすからさ」
亭主の言葉に、にわかに気分が重くなる。
あの食事をまた作るのか。　あの面白くもおいしくもない、重くて手間ばかりかかってだれも喜ばない、飼料と同じ拷問食を。
いやだいやだと心の中で、子供みたいな私の一部が転げまわって泣き叫んでいる。
せっかく一大決心して、これがもとで離婚するかもとまで思って魔女になって鬼嫁になって、そうやってもう作らないと宣言したのに、ここで覆されてしまうのか。

でも、私はその思いをぐっと抑え込んだ。
私の望みは、この労働を対等の分業と認めてもらう事だったはずだ。　ここで拒否したら、自分で自分の労働を感情の産物と認めることになってしまう。
家事労働は、愛情を押し付けるためにするのではない。　家で自分のことを充分にする暇がない家族に代わって、身の回りのことを代行するのだ。　だから、自分はこうしたい、それを代わりにやってくれと言われたら、その通りにするのが筋だろう。　ならば、こんな風に口に出して言われたこと、しかも給金まで提示されたら断

ったりしては女がすたるというものだ。
第一、ここで断ったら、それこそ亭主が血管を詰まらせた時に全面的に私の落ち度になってしまう。
私は落合さんのように、亭主の葬式で「私のせいだ」と泣くのは嫌だった。　あの時素直に制限食を復活させてればよかったのに、と泣きわめくのはまっぴら御免だ。

「そうだね、頑張りましょうか。　まだ子供も小さいんだから、うっかり死んだりできないもんね」
「お前も死ねんぞ。　お前死んだら俺の食事うどんばっかりだ、俺絶対すぐ死ぬわ」
二人で苦みのある笑いを漏らした。
実はこの時もらった３００万が、そののちにとんでもない場面で私たちを救うことになるのだ。

その日から亭主は、ぴたりと間食を止めた。
足の腫れが引くのを待って運動を再開した頃には、すでに3キロ体重が落ちていた。　私も必死でいろいろな工夫をして制限食を作ったので、それだけを食べていれば痩せないわけはないのだ。
かくして亭主が職場に復帰するのに、その後わずか2か月足らずで事足りた。

さて。
後日判明したことだが、亭主がダイエットを成功させた裏には、落合さんの心筋梗塞以外にもひとつの思いがあったらしい。
通夜と葬儀ではち切れそうなズボンを履いて行った亭主を見て、集まった会社の同僚たちがこう言ったのだそうだ。
「香川よ、なかなか復帰して来んと思ったら、ますます太ったじ

ゃないか。
　こりゃあ、今年度中の話になりそうにないなあ」
ズボンがピチピチなのは足の腫れのせいなのに、そう見えないほど体全体にマッチしているのか！！
それが何よりショックで、その悔しさが、彼らの鼻を明かしてやりたいと言う秘密の原動力になったということなのだそうだ。
総じて、男は男に勝ちたがる。
家族のためになんてふんぞり返るよりも、いっそこの方が亭主らしいと笑ってしまった。

１５、亭主に言われて一番うれしかった言葉と、貰って一番うれしかったもの

予定外になりましたが、一区切りついてしまいましたのでここで
章分けをすることにしました。
第一章の終了です。２章はここより５年後の話になります。

1、超問題児と超優等生を同時に抱える親の悩みは

「パパその箱、蹴らないでッ」

わが香川家では、部屋の真ん中近くに不当にのさばっているおもちゃ箱をうっかり蹴飛ばすと、その人には間違いなく不幸が訪れる。

最近のおもちゃは何でもかんでも音や声が出るようになっていて、中には体に装着して歩くたびにロボットのような機械音が出るものまである。　うかつにおもちゃ箱を蹴とばすと大騒ぎだ。　子供のことだから、ちゃんとスイッチを切って収納してくれているとは限らない。

振動を与えた途端、箱の中からピョピョピョピョーンとかシュバシュバッとかガシーンとか、雑多かつ複雑極まりない音が響き渡る。

それだけならただ驚くだけで済むのだが、この音はある平凡な子供に、ヒーローへの覚醒を促す効果があるらしい。

機械音が響き渡ると、それまでテレビを見ていたその子供の本性は、突如目覚める。　そして数秒後にどこからか風呂敷をマントにした豆ヒーローが現れて、臍から下ばかりを滅多打ちにしてくれるのだ。

このヒーロー、我が家の第2子にして長男坊の司、4歳。　別名を「人間シンセサイザー」と言う。

「平和な地球を悪に染め、未来の夢を打ち壊す、悪の組織は許しておけん。

このツカサ斬月剣が退治てくれる！　いざ抜刀『シャキーン（生効果音）』はあッ！『ズキュッ！　ピシューン！　ボヒュボヒュボヒュ！　シュザッ！』♪ちゃーんかちゃーん、ちゃーんかちゃーん、ちゃらららっちゃちゃーん（マウス伴奏ＢＧＭ挿入）『ラシュポ、

ラシュポ、ズズズズーン』よし今だ！　ツカサ斬月夕凪！　『ビービビビビビ！　シャキーン！』　♪ちゃらったらーん！」

登場から決めポーズまで、完璧に音声をコピーした効果音。　よくもまああんなに多彩な音が出せるもんだよと、感心して見ていたら大変なことになる。　うちの亭主は、この種の冗談に付き合って痛い思いをしてくれるほどオトナなダディではないのである。

「なにが♪ちゃらったらん♪じゃ！　何もしてない親を殴るのが正義の味方のすることかこのこのこのこの！」

「イタイタイタイ、ふえええええん！」

「ほらほらちゃんと戦えよ！」

「うえええええええん！」

司の凄いところは、実際に思い切り殴られて半泣きになろうとも、自分の反撃は「しゅぼぼぼぼぼぼ」と電磁ビーム（最強との設定である。こういうタイプの子供が、スーパーマンを気取って本当に2階からダイブしちゃったりするのだろうと、母である私は毎日ビクビクして目を光らせている。

間違えて飛び降りでもしたら大変だ。　何しろわが家は、5階建社宅の5階に位置しているのだから。

父親にさんざんやられて、ビービー泣きながらキッチンに逃げ込んで来た司は、まず自分の掌で痛いところを念入りにこする。

続いて私のお尻のあたりに、殴られた頭の部分をごしごし押し付ける。　それでも気が済まないと、お気に入りの怪獣の縫いぐるみを持って来て、それで患部をこすりまくる。　どうやら好きな物の匂いがつくと気が済むようである。　この辺の反応がほとんど動物だ。

非常に念入りな乾布摩擦のあげく、ようやく気が治まった司は、

こんどは私の体にぴったりくっつく。

涙が止まったら、興味が他に移るのも早い。　私の手元を見て見当違いなことを言いまくる。

「鯛だ」

「ブー。　鯵(あじ)です！　全然違うでしょうが」

「これ、痛いね」

「わ。　いきなり手を出すな、切っちまうだろが！」

「この痛いの何？」

「ぜいごって言うの。　しっぽのとこに……」

「こっちには痛いけどこっち向きに触ると痛くない、どうして？」

「おまえ、人の話聞けよ！　泳ぐときの方向に滑らかなようにできてんの！　鱗もそうでしょ」

「泳ぐ方向」

司はいきなりキッチンのところどころ濡れた床にごろんと寝そべり、床の上で泳ぎ始めた。

「そこで寝るな！　濡れてんだから！　汚れるって」

「あああああああ？」

いきなり大声を上げて飛び起きた司は、私の腕をがしっと握る。

包丁を持っている方は心臓が躍り上がる。

「危ない！　手え出すなっつーにッ」

「今ママ脳みそ出したね！！」

「脳みそなんか出しとらん。　脳みそってのは頭にあるもんでしょう。

今切ったのはお腹だから取ったのは内臓だって……って、なんでお前いちいちそこに寝転ぶの！？」

司は床の上で泳ぎながら、自分の体を撫でまわしてつぶやいていた。

「オナカがここ。　頭がここ。　お腹が下で、頭は上。　で、ひっくり返ったら」

立って生活している人間と、横になって泳ぐ魚のからだの上下構造が判らなかったらしい。
私は魚を一匹皿に入れて、寝そべった司の隣に同じように寝かせて置き、手鏡を持って来て上から映してやった。
「ほんとだ、ここがお腹だ」
我が家の長男はやっと納得した。

「つか坊、もうすぐ5歳になるんだよねえ」
「そうだな、あれでもな」
「あれでもよ。　あと4か月で年長さん」
「ため息つくなよ」
「だって生活発表会があるんだもの。　気が重いわあ」

子供たちが寝てから、亭主にコーヒーを淹れて渡すと決まってこんな話になる。
わが家の長男は、今年の春に幼稚園の年中組になり、彼としては園児ライフを満喫して実に楽しい日々を過ごしているらしかったが、それはすなわち周囲の大人とクラスメートにとっては結構な負担となっているようなのだ。

司は3月の27日生まれだ。　クラスの中では、この世に生を受けてからの生活時間が一番短い子供であるという。　そのことは誰でもわかる事なので、担任の先生も入園前からいろいろ考えてくれていたらしいのだが、どっこい司のマイペースぶりにその準備が追いついていかなかった。
入園から何か月経っても、園にお迎えに行った時、整列した園児の列の中に司の姿はなかった。　大抵、どこかにふらふら遊びに行ってしまっており、それを周りの園児が連れ戻しに行ってくれてい

たのだ。
参観日で何かを制作していても、司は気が向くとふらりと席を離れて消えてしまう。　追いかけて見ると、廊下で飼育箱の中の虫を見ていたり、突然誰かの鞄のイラストを見て戦隊ヒーローに成り切っていたりする。
「何してるの？　部屋に戻りなさい。　作りかけた物は終わりまでやらないとダメよ」
私がたしなめると、はいと返事をして、大して嫌そうな様子もなく部屋へ戻って行く。　その場で一言言うだけで解決するのに、居なくなって大探しする段階まで誰も注意してくれないのだろうかと、親としては不満だった。

「ああ、先生たち苦労してらっしゃるわね。
やっぱりほら、障害児さんを受け取ると大変ですよねえ」
夏の参観に行った時、司を追い回している先生を見た保護者の女性が、そう私に話しかけて来た。
その人は転入したばかりの園児のお母さんで、まさか私がその「問題児」の親だとは思わなかったのだろう。　当時、クラスにはヤマト君というダウン症の男の子がいて、「障害児さんがいる」と誰かから聞かされていたそのお母さんは、それがうちの息子のことだと思い込んでいたらしい。

司に障害らしいものはない。　それどころか、家にいる時にはそこまでの問題児には全く思えないのだ。
確かに少々個性的すぎるところはあるが、親のいう事はきくし、落ち着きはなくても我慢することは出来る。
園での司は、必要な何かがコンセントに繋がっていない状態だと思われた。

彼は先生の指示があまりよく理解できなかった。

もともと自分の好きな物以外に極端に興味が薄い傾向のある子供だから、普通このくらいの歳の子は知っていて当たり前だと思われる単語が頭に入っていないことがある。　緩慢に把握するのが苦手なのだ。

恐竜や怪獣の名前、車や電車の名前を異常に詳しく言えるのに、馬とヤギと牛の区別がつかない。

「門」と「ドア」と「窓」の名前がはっきり使い分けられない。「箪笥」「鏡台」「ベランダ」など、家の中で普通に使っている場所や家具の名前が頭に入っていない。　すでに8カ月も一緒に生活していて、毎朝出席を取る時聞き飽きている筈のクラスメートの名前を、6人ぐらいしか覚えていない。

一つずつ指さして、これが鏡台よ、ここがベランダよと教えればすぐに覚えるのだが、普通はそこまでしなくても日常の中で覚えてしかるべきものだ。　現に1学年上の長女の蘭の場合、物の名称を指さして教えたなんて2歳くらいまでだが、会話が出来るようになるといちいち教えなくても自分で名前を覚えてくれた。

多分、司はそういう記憶に「穴」がありすぎて、幼稚園でも先生の指示が判らないのだろう。

「正門前に集合」とか言われて裏門に行っちゃったり、「テラスで遊びなさい」と言われてブランコで遊んだりしてしまうのだろう。

その度に叱られたりあきれられたりするので、先生との信頼関係もうまく成立していないのだ。

そして、この秋に行われた運動会で、事件は起こった。

鼓笛隊の太鼓をやるはずだった司と、隣で一緒に動くはずだった

ユタカくんという男の子が、入場門前で出番を待っている間にふたりして行方不明になり、結局彼らは演技に出て来れないまま演目が終了してしまった。　どうやら司がおしっこに行くと言いだし、ユタカくんが連れ戻そうとして列を離れたらしい。

怒髪天を突いたのはユタカくんの両親だった。
司が頼りないので、わざとしっかりしたユタカくんと組ませてあったという話を聞いては尚更だった。
「他のおバカな子の子守りをするために、高いお金を払って幼稚園に入れたのではありません。　今後もその子が同じクラスにいるなら園をやめます」
そう言って、さっさと他の幼稚園に移ってしまったのだ。
私は最近になってから、その話をよそのクラスのお母さんから聞いて愕然とした。　その人の口ぶりだとまるでうちの息子がユタカくんを追い出したような、ひいては私が司のしつけをしていない馬鹿親だから、担任の先生が窮地に立たされたかのような印象を受ける話だった。

本音を言えば不満である。
実は私にはたった3年間であるが、保育士として働いた経験がある。　だから今回のことで、うちが必要以上にユタカくんの家に対して縮こまることはないのだと判っている。

例え親のしつけが悪かろうと、子供がとんでもなかろうと、園児の逃亡は全面的に現場の先生の責任だ。
例え家で親が口を酸っぱくして「決まりを守りなさい」と言っていても、現場の先生が決まりを破った子を注意しないでいつも放置していたら、子供は決まりを決まりと認識しないで、平気で破るだろう。　逆にどんなに親がユルユルでも、現場の先生が厳しく管理していたら、子供は園内でだけは言うことを聞く子になるだろう。

実際、保育士をしている時には、発表会でちょっと子供が失敗しただけでも、自分の責任と思って反省をした。　司の担任もまともな神経を持っているなら、今回の失敗を自分の責任以外の何物でもないとちゃんとわかっている筈だ。　現に運動会の後、ご迷惑を掛けましたと謝りに行ったら、逆に先生の方が平謝りだった。

「香川さんが躾をしないなんて、とんでもない。　蘭ちゃんを見てるから、年長さんの担任は全員、滅茶苦茶よくわかってますよ。どうやったらあんな子になるんだろうって不思議がってますもん」

蘭の担任の柳田先生は、そう言って私を慰めてくれた。

蘭は司と正反対で、園内では屈指の模範園児だった。　先生のいう事は完璧に守り、何をやるにも熱心で、人の面倒をよく見てお手伝いもする。　運動は苦手だが、嫌いなことも嫌がらずに出来るまでやり、出来なかったお友達を励ましていつも楽しそうだ。

去年の生活発表会では、オペレッタで最初から最後まで出ずっぱりの進行役をやり、出遅れた子のタイミングをずらすように他の子に指示したり、台詞を忘れた子に囁いてあげたりして、まるで先生の助手のように活躍していた。　舞台が終わった途端、担任の築山先生が涙顔で「蘭ちゃんのおかげです」と私に駆け寄ってきたくらい、立派な舞台だったのだ。

あれを見ている先生方は、司の問題が「親の躾」ではなく「個性」だと判ってくれている筈なのだ。

それでも、人の親というものは、なかなか割り切って胸を張れるものではないのである。

ユタカくんのお母さんと親しかった人は、園内に沢山いるだろう。

その人たちの中では、私は子供の躾をしない無能で図々しい馬鹿親という事になっているのだろう。

2月に行われる生活発表会が憂鬱なのは、そういういきさつがあったからなのだ。

「司の集中力は、ネジ巻き玩具みたいなものだからなあ。
巻いた途端にぶわーっと動いてブツンと終わる。　誰に似たのかなあれは」

他人事みたいに言う亭主の顔を、私はあきれて凝視した。　視線を下ろしてお腹周りを睨みつける。

亭主は、一度ダイエットに成功して8キロ痩せたあと、持続するのが難しく結局半年で間食癖を再発した。　食餌療法担当者としては堪ったものではないので、それなりに抗議も抵抗もしたのだが、その場逃れで反省してはまたこそこそ食べる。

痩せた時に全部買い換えた背広やジーンズが、少しずつ先代の物に戻りつつあるのを、奥さんが怖いから言えずにいるらしく、いつもあまりぴったり体にフィットしない皺だらけの古い洋服を着ている亭主である。　それでも一度も欠かしていないのは、毎朝のマラソンと休日のバドミントンだ。　これは体のためと言うより、単に好きなスポーツだからという事らしい。

「ホントに誰に似たんだかね」
私は司と亭主を見比べながら吐き捨てた。

しかしこの時期、悩みはたくさんあったにせよ我が家は平和だった。

そのあと、大型台風が相次いで上陸するという事は、この時点では誰もわかっていなかったのだ。

1、超問題児と超優等生を同時に抱える親の悩みは（後書き）

第2章は5年後の話、と予告しましたが、正確に勘定して見ると4年と半分弱くらいから始まってしまいました。

蘭6歳、司4歳半です。　書ききれなかったのですが、亭主の生活についてもこのあと書いて行きます。

2、家では冴えない陸トド亭主が会社で「男かぐや姫ごっこ」をしているとわかる

長女の蘭が生まれて半年ばかりの頃、亭主は自分があらゆる人から「パパ」と呼ばれ始めたことに、一種の抵抗を示した。

「おい、なんでお前までパパって呼ぶんだよ。　子供にはパパと呼ばせても、お前は『一平』のままでいいじゃないか」

「そんな甘ったれたことを言ってて、子供にまで名前を呼び捨てられる羽目になった父親を知ってるからよ！」

そう、子供の理解力に過大な期待をしてはいけない。　ヤツらが「自分」と「他人」の立場や呼び方の違いを多少なりとも理解してくれるのは3歳以降のことで、家族の呼び方などの基本的な名詞はその前にガッツリ定着してしまう。

藤崎という私の高校時代の友人は、自分の父親を「マサオ」と呼んでいた。　彼女が「昨日マサオがね」などと話し始めると、周囲が「こいつカレシいたっけな」といぶかしげな顔をしたものだ。

なんでも母親がそう呼んでいたのでそのまま定着したらしいが、幼稚園の頃の彼女は、「なぜうちにはお父さんがいないのだろう」と、密かに悩んだことがあったそうだ。　呼び名というものは、子供には大事な物なのだ。

だから、子供が片言なりとも人間の言葉をしゃべるようになると、周囲はそれに巻き込まれ、あらゆるものや人の呼び方を変えてゆくことになる。　「あなた」を「パパ」に、「お風呂」を「ボチャ」に、「車」を「ブーブ」に。

先日、姉の家に行くと、

「悪い、そこのお布団を畳んでどけて座ってくれる？　あ、隣の『おクトン』も一緒にお願い」

と言われた。　「お布団」は普通の大人用の布団、「おクトン」

と呼ばれたのは、古い子供用の肌掛布団だ。　姉の子供たちはもう高校の制服を着ている歳だが、昔使っていた幼児語が一部固有名詞になって、古い布団と共に残留しているらしい。
　こういうことは、どこの家でもあることだ。　だからこそ、子供に人の名前を教える時は、一生呼ばれる覚悟で与えなければならないと思う。　物の名詞は大きくなって呼びかえることもあるが、人の呼び方は相手との約束事でもあるので、意外と変えにくいものだからだ。

　姉の家に一人目の子供が生まれた時、私はまだ２０歳になったばかりだったが、迷わず、
「私のことはおばさんと呼ばせて。　だって小母さんなんだもの」
と言っておいた。
　親族関係が小母と姪である以上、どんなに抵抗しても「小母さん」から一生逃れるわけにはいかないのだ。　５０歳６０歳になっても無理矢理「お姉さん」と呼ばれるのもどうかと思うし、「実は小母なのよ」などと周囲に説明して歩くのも面倒な気がする。　物心ついた姪っ子本人に「もうおばさんって呼んでもいい？」なんて聞かれるのも物悲しい。
　それよりもあと数年だけでも「あら若いおばさんね」と周りに笑ってもらえた方が気分がいいのじゃないかと、その時なりに考えてしたことだった。　今もそれは間違いではなかったと思っている。

　さて、６歳になった我が家の長女・蘭と、４歳の長男・司には、「おばあちゃん」と呼ぶべき人が二人いる。
　これは別に珍しいことではない。　私の母と亭主の母がいるから当たり前だ。
　亭主の父親は既に亡くなっており、「おじいちゃん」はひとりだけなので問題ないのだが、二人いる「おばあちゃん」には、区別を

つけるための固有名詞が定着している。

「ママー、にゃんこばあちゃんから電話だよ」

土曜の昼下がり、蘭がおやつを口の周りにいっぱいつけたまま、電話の子機を持って走って来た。

「にゃんこばあちゃん」は私の実家の母のことである。　家に猫を飼っていて、この猫が蘭のお気に入りであったことから、「にゃんこを飼ってる方のおばあちゃんよ」と言っていたのが固有名詞化したものだ。

ちなみに主人の方の母、つまり私の姑に当たる人のことは、「サニーばあちゃん」と呼んでいる。

彼女は「サニー（株）」と書かれた看板のある会社で経理事務の仕事をしており、看板を見た娘が「サニーで働いてるおばあちゃん」と言い始めたのが縮まったのだ。

「ありがと、蘭。　それからパパがマラソンから帰って来るまでに、おやつは片づけておくのよ」

「うん。　パパ食べたくなっちゃうもんね」

電話の子機を私にくれながら、心得た娘はにっこり笑った。

今や、亭主の過食防止の見張りはもっぱら娘の役目である。　女房というものは、どんなにガミガミ言ったところでやはり大人同士でパートナー意識もあるものだから、あーんと開けた口の前から食べ物を取り上げるような強引な真似はなかなか出来ないものなのだが、娘は平気でそれをやる。　しかも男親は娘に甘いので、女房がやるより角も立たないもののようだ。

「今日子、明日の話だけど、つか坊を預かるのはやっぱり無理だわよ」

電話の向こうの母は、きっぱりとした口調で言い切った。　言い

にくいことも、こうと決めてしまうとサバサバと言うのがこの人の割り切ったところだ。

「無理って、何か用事？」

「そうじゃなくってもう手におえないってことよ。　あの子すごくよく動くから危なくて、こないだもソファやテーブルを全部物置に入れて預かったのに、玄関で頭ぶつけたでしょう。　うちは子供用に設定した家じゃないから、ガラスのはまったドアも多いし、ずーっとハラハラして見ていられないのよ。

蘭ちゃんなら、抱っこして本でも読んでれば2、3時間大人しくしてられるからいいけど、つか坊は抱っこしても30秒しないうちに飽きて降りたがるでしょう。　家の前の車道に飛び出すし、急に『ばーちゃーん』ってドシンとぶつかって来るし、母さんも父さんももう歳が歳だからね。　ちょっとやってく自信がないのよ。それでなくても、うちは女の子しか育てたことがない家なんだから」

「蘭だけならいいの？」

「それは大丈夫よ」

ここでも司は問題児だった。　母はもともと責任感が強いので、預かると言ったらパーフェクトに面倒を見てくれる。　逆にダメと言ったらもうそれは決定事項だ。

確かに、司の世話をしていると、今日こそは怪我をさせてしまうかもという覚悟なしには見られないところがあるだろう。　潔癖な母にはそんな無責任な引き受け方は出来かねると言ったところなのだろう。

母の気持ちは充分わかったのだが、この拒絶は私にとって痛い仕打ちだった。

司があちらでもこちらでも「弾かれ」て、家以外に行くところが無くなってゆく。　理不尽な悔しさと同時に、この事実を全て親の育て方の罪として、甘んじて受けなければならないぞと、心の中で両足を踏ん張っている自分がいる。　その自分自身に立ちはだから

れて、本当の私が前方をきちんと見ることが出来ないでいる。
頑張る私が、どこかで邪魔くさい。　そんな痛さだった。

実は明日の日曜日、市内で駅伝大会が開かれるのだった。
亭主の会社からも１０名２チームが参加することになっており、亭主もメンバーに入っている。
「子供も連れて応援に来てくれ」
と言われたが、１２月の寒空に５時間強、しかも球技ならともかく、いつ盛り上がるかわからずひたすら待つばかりのマラソンの応援に、小さい子供連れは難しい。　とりわけ司は、どこに行ってしまうかわからない子供なのだ。
しかもこの時私は、自分自身が応援に行けるかどうかも確信できない体調だったのである。

うっすらと吐き気がする。　熱もないのに微熱の時のように体が頼りない。
この微妙な体調不良は、過去に２回ほど経験した記憶があった。
「絶対いるって。　いる気がするの」
「お前、寒い中応援に来たくないから適当に言ってるんじゃないだろうな」
土曜の自主練マラソンから戻った亭主が眉をひそめて怪しんだ。
「病院行って確かめてみたのかよ」
「まだ病院でもわかんない時期なのよ。　たった１か月だもの、いつもそうじゃない？　でも、私にはわかるんだもの。
蘭の時も司の時も、病院でまだ確認できませんって言われた時から私はわかってたわよ。　あの子たちふたりとも、それがなかったら生まれて来れたかどうかわかんなかったんだからね」

その月の生理が遅れていた。　といってもたった2日のことなので、普通は気にならない筈なのだが、この時何故か猛烈に嫌な予感がしたのだ。
思い起こせば7年前、蘭がお腹にいると判ったのは、膀胱炎で泌尿器科を受診したのがきっかけだった。　薬を処方してもらう段になって、突然嫌な予感がして、医師に
「その薬、妊娠してても大丈夫ですか」
と聞いたところ、それ用の薬ではないと言われたので、妊娠していても使える薬に代えて貰った。
その足で同じ病院の産婦人科を受診して、妊娠の検査をしたが、その時はまだわからなかった。　わかったのはさらに2週間たって、やっぱり生理が来ないからともう一度受診した時だった。

司の時も同じだった。　夏でも滑れる屋内スキー場のチケットを貰ったので、蘭と亭主と3人で行こうとしていたのを、なんとなく体調が不安だったのでキャンセルしたのだ。
まだ市販の妊娠検査薬など発売されていなかった当時から、私は誰より早く妊娠の兆候をキャッチすることが出来た。　生理周期が非常に正確だったためもあるが、やはり「母のカン」というものも多少は働いたのだと思う。　悲しいかな、お腹の外に出た子供に対しては、さして働くことのないカンであったが。

「絶対できてるって、3人目！！」

この体調で、寒風の中、子供を抱いたり追い回したりしながら1日がかりでマラソンの応援をするのは絶対にまずい。　出来れば家で待機させてほしい。　その旨亭主に申し出たのだが、
「わかった。　それじゃ蘭はばあちゃんに預けて、司は部下が応

援に来るからそいつらに見させよう。
　お前は司を連れてスタート地点で見送ったら、家に帰ってていいよ」
　亭主の感覚がずれていると感じるのはいつものことではあったが、この時も首をひねらざるを得なかった。　私がいないのに司だけを置いて帰って何になると言うのだろう。

「家族が誰一人、ゴールで待っててくれないなんて寂しいじゃないか」
「そりゃわかるけど、それで司が家族代表？」
「いいだろ、あれでもうちの長男だぜ」
「いいけど絶対、５時間も待ってなんかないと思うわよ」

　部下たちの前で家族に慕われているところが見せたいのか、私が冷たくしたと思って意地になっているのかはわからないが、司を赤ちゃん扱いしない亭主の考え方は好きだった。
「男の子はいかにわからんちんでも、いつか化けるさ」
　この状況下でそんなことを言われたら、私もなんだかほっとして涙が出そうになってしまう。
　でも、休日なのに子守りを命じられた部下の人たちは、さぞかし苦労することだろう。　かぐや姫に課題を出された求婚者の方がましなくらいの、理不尽な苦労を。
　それがまたやるせなくて申し訳なくて、その晩はいろいろと考え込んだ私だった。

　ところが次の日、亭主の車で競技場につくなり、予想外の状況に驚いた。　あまり驚きすぎて、申し訳ないなんて感情は一瞬で青空の彼方まで吹き飛んでしまったくらいだ。
「香川主査。　おはようございます！」
　まず車に駆け寄って来たのは、身長１７５センチくらいの、モデ

ル雑誌から抜け出して来たような美人のお嬢さんだった。　その後ろから、ちょっと太めだがハーフっぽい感じの、やはり妙齢のきれいな女の子が、先の美人を押しのけた。

「ちょっと、麻生さん邪魔！！

主査おはようございます、今日は頑張ってくださいねえ！」

なんだなんだ、競い合う若い美人の部下を保育士に雇ったのか？

もしかして「逆かぐや姫ごっこ」か？

ずいぶんすてきな職場だな一平ちゃん！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0121k/

魔女のキッチン

2011年11月17日08時33分発行